九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[37] Crossover

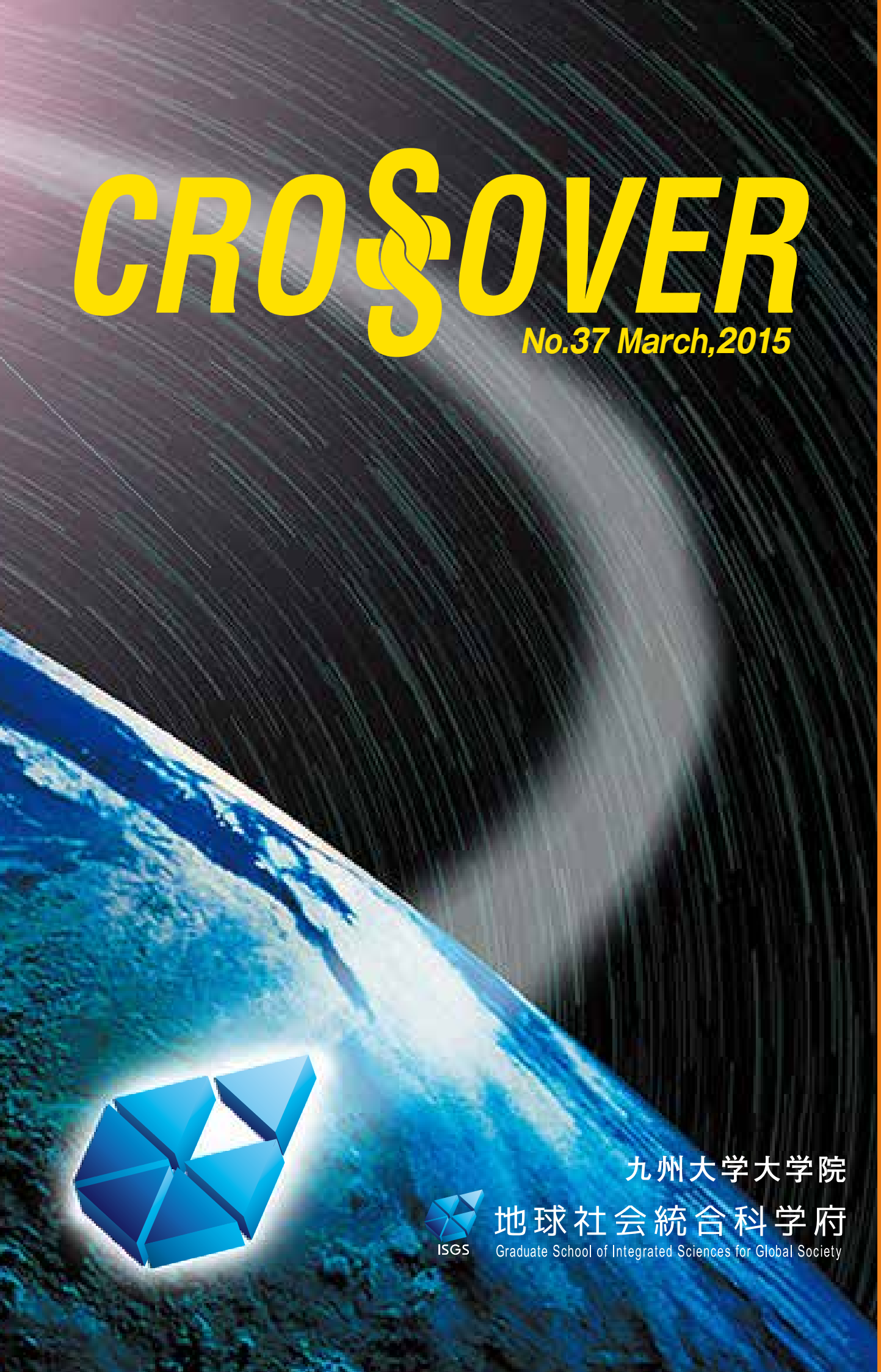
https://hdl.handle.net/2324/1906484

出版情報：Crossover. 37, pp.1-, 2015-03. Graduate School of Integrated Science for Global Society, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

CROSSOVER

No.37 March,2015



九州大学大学院

地球社会統合科学府

ISGS

Graduate School of Integrated Sciences for Global Society

Contents

巻頭言
走る改組から、歩く成長へ …… 古谷　嘉章 … 1

新任教員紹介
社会の新しいものさし …… 稲葉美由紀 … 2
熱帯農業微生物と環境リサイクル …… 松元　賢 … 3

受賞報告
著書の出版と第8回九州考古学会受賞 …… 溝口　孝司 … 4

自著を語る
中国での出版 ―拙著『新見歐陽脩九十六篇書簡箋注』― …… 東　英寿 … 6

プロジェクトレポート
1μmの生命から地球を科学する …… 柳川　勝紀 … 7
中国・山東大学への訪問と学術交流会を実施して ……阿部 康久・李 暁燕・秋吉 収・林 心泰 … 9
「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」
スリランカ実地調査の報告 …… 小山内 康人・荒谷 邦雄・舘 卓司・中野 伸彦・笹原 純子 … 11

リーディングプログラムレポート
フューチャーアジアプログラム　平成26年度活動報告 …… 13
「フューチャーアジアプログラム第1期生」 …… 福永 裕美・毛 雪梅 … 17

地球社会統合科学セミナー報告
第6回地球社会統合科学セミナー「アジアを生きる: 交流・移動・定着」を終えて …… 長谷千代子 … 18
第7回地球社会統合科学セミナー: 「多様性共存の可能性
―ジェンダー・セクシュアリティ・クィアの観点から―」 …… GERMER Andrea・眞野 豊 … 19
第8回地球社会統合科学セミナー
「市民の心・民族の魂 ―ヨーロッパ歴史意識の普遍性と個別性」の開催 …… 松井　康浩 … 21

海外レポート
海外での学会発表を通じて …… 岩橋　由季 … 23
国家の枠を超える日本語文学研究
―「近現代文学と東アジア」研究会第二回合同研究会の報告― …… 大場　健司 … 25

国内レポート
Our Faculty Members Actively Participated
in the XVIII ISA World Congress of Sociology …… Shuanglong Li … 27

新しい出発
周囲の背中に希望を見出して …… 草野　真樹 … 29
片道2万キロ …… 米村　和紘 … 31

社会人院生コーナー
大学院生活の半分を終えて …… 藤井　整 … 32

博士論文を書き終えて
博士論文を書き終えて …… 石田　智子 … 33
博士論文を書き終えて …… 福井　令恵 … 35
博士論文を書き終えて …… 青木志穂子 … 37

大学院データブック …… 39

表紙の説明

ロゴマークは、「地球社会統合学府」の6つのコースを表わしています。すなわち「地球社会統合学府」そのものです。本学府の理念にある「現場主義の精神」、「フィールドワークによって諸問題を究明する」姿を、ロゴマークが地球規模の遥かなる未知の領域へと飛び立つ姿、または、地球と地域をリードしていく姿の象徴として表現しています。

巻頭言

走る改組から、歩く成長へ

古　谷　嘉　章
（地球社会統合科学府　学府長）

地球社会統合科学府が4月に設置されてから8か月余りが経った。幸い多くの意欲的な学生が入学してきてくれて、ありがたいことだと思う。他方、在学中に学府の改組に遭遇してしまった比較社会文化学府の学生たちには、たいへん申し訳ないと思っている。新しい学府の学生たちに、構想したとおりの、あるいはそれ以上の教育指導を行うことは、私たち教員全員の使命であるし、比較社会文化学府の学生たちに、お約束していたようにしっかりと最後までサポートすることも、私たちの大切な使命である。肝に銘じておきたい。

しかしその肝である。いや肝だけでなく、身体全体が、ちょっと休ませてくれませんかと悲鳴を上げはじめているような感じがしていることも確かなのである。私のことである。しかし私だけなら、誰か元気な人に代わってもらえばよいが、もしかすると、気合だけを頼りにおよそ3年前からの改組の全作業、そして設置後の日々の対応を乗り切ってきた献身的な同僚たちも、同様に感じているのではないか。そうであるならば、叱咤激励して「肝に銘じて」事足れりとするのではなく、しばし立ち止まって、肝や膵や胆や腸や胃など、「からだの声」に耳を傾けることが必要なのではないかとも思う。

地球社会統合科学府長や比較社会文化学府長というのは、けっして「いわゆるリーダー」ではなく、諸雑事を日常的に解決するためのたんなる中間管理職にすぎないことは明白なのではあるが、そのようなしがない職務であっても、みなさんを鼓舞して「力を合わせて実現しよう」などと、空元気を出して旗を振らなければならない局面もありはする。改組というのは、そのような局面だったと信じたい。そしてあのときには、とてつもない超スピードで、休日も時間外もなく対応しつづける以外の、悠々迫らぬ対応など、不可能だったのである。しかしその結果、少なくとも私たちは、主体性のない清算事業団へと転落することは免れて、九大の将来を託すべき学府として踏みとどまったのである。それはいまのところ種にすぎないかもしれないが、成長し、大きく花を咲かせ、充実した稔りを予期させる種である。

しかし、種が芽をふき、茎を伸ばし、葉をつけ、花を咲かせて、実を結ぶ、そのプロセスは、一気呵成に息を止めて休日も返上して残業しながら実現するようなものではない。もっと息の長い、時間のかかる、「自然のテンポ」に合わせて、ようやく可能になる営みである。それは、地球社会統合科学府のひとりひとりの学生の勉学もそうであるし、学府のしくみやカリキュラムに関してもそうであるし、そして学府そのものについてもそうである。学生たちが地球社会統合科学府に在学するのは、修士と博士を合わせても5年間にすぎず、そこでの勉学がどのような成果を生んでいくのかは、その学生の人生全体におよぶ事業である。5年で結果が出る促成栽培ではあるまいし、ほんとうの成果が目に見えるようになるためには、もっと長い時間がかかるだろう。そもそも教育というものがそういうものであることは、周知のことだったはずなのに、いつの頃からか、工場の商品生産の品質管理みたいなことになっているのは、どうしてだろう。学府のしくみやカリキュラムに関しても、設置を認めてもらうために、頭を絞って、あらゆるケースを想定して、デザインしたつもりだったが、現実には、教務学生委員長はじめ皆さんが日々実感しているように、さまざまな調整が必要になっている。これについては、かねてよりお伝えしているように、設置の理念に合致しており、学生の利益になることであれば、積極的に修正していくべきものと考えている。そういうと第一期生はモニターみたいで申し訳ないが、いっしょに作っていく醍醐味も味わえるので勘弁してねと頭を下げておこう。

そして生まれたばかりの地球社会統合科学府だが、いつまで続くのだろう。天の下のもので、始まりがあって終わりがないものはない。願わくは、比較社会文化学府がそうであったように、充分な時間をかけて、成長し成熟して、振り返ってみれば「つくってよかったね」と言えるようなものになってくれれば、誕生にあたって、いくばくかの手助けをした者としては、これに優る喜びはない。しかしそのためには、焦りは禁物だろう。

もうそろそろ、走る改組は卒業して、じっくりと、広い視野と遠い見通しをもって、ゆっくりと歩きながら、地球社会統合科学府を成長させていく段階へと、ギアチェンジをしましょうというのが、たまたま選挙で選ばれて、副学府長として改組の世話役を務め、その後始末をするようにと学府長の任を与えられた私が、いま皆さんに呼びかけたいことである。

○○○ 新任教員紹介

社会の新しいものさし

稲葉美由紀
（国際協調・安全構築コース）
（言語文化研究院）

2014年4月1日付けで地球社会統合科学府の国際協調・安全構築コースに着任いたしました。2000年2月にアメリカコロラド州デンバーから地元福岡へ戻ってきました。2004年10月に九州大学に赴任する前は、福岡県立大学、デンバー大学、バンコクの国連アジア太平洋経済社会委員会（ESCAP、国連職員採用競争試験合格）、㈱リクルートなど国内外の職場に勤務していました。

学部教育はロッキー山脈のふもとにあるコロラドカレッジで政治学を専攻し、その後ミネソタ大学公共政策大学院では開発政策とNPOマネージメントを学びました。振り返ってみると留学中にニューヨーク国際連合（UN）本部、移民支援NPO、高齢者施設、難民障害者支援機関などでインターンシップとボランティアをした経験は私の卒業後のキャリア形成に大きな影響を与えてくれたと思います。国連勤務後はフルブライト奨学金と平和中島財団奨学金をいただき、デンバー大学ソーシャルワーク大学院へ再び留学する機会を得ることができました。国連の顧問をされていた私の指導教授ジョン F.ジョーンズ教授と一緒に先進国における開発的ソーシャルワークの研究に取り組みながら、同大学ジェロントロジー研究所では高齢者に関わる社会政策、アメリカ先住民高齢者と貧困問題、高齢者を対象とするエンパワーメント実践に関する研究と実践に携わりました。まだ研究が少ない要介護高齢者の役割について質的調査を行い、その結果をソーシャルワーク実践へつなぐ内容で現在も引き続き共同研究を行っています。博士論文は“Evaluation of Mi Casa Microenterprise Program for Women on Welfare”というタイトルでアメリカの福祉政策を政治経済的観点から捉え、1980年代後半からウェルフェア・マザー（福祉受給母子世帯）の経済的自立支援策として注目され始めたマイクロクレジット・プログラムの有効性と課題について当事者の声に焦点を当てて事例研究を通して検証したものです。対処的・治療的な介入が主流であるアメリカのソーシャルワーク実践を補完する方法として従来の福祉の枠を超えた予防的・開発的アプローチの必要性を主張しています。

国連では開発行政や開発途上国の社会政策とコミュニティワーカーを対象とする研修事業に携わり、アジア太平洋地域の政府機関、国際機関、NGOおよびソーシャルワーク系大学と連携し、実務経験を積みました。

「ソーシャルワーク」といっても多くの皆さんにとって聞き慣れない言葉かもしれません。一般的には社会福祉学と同義語として使われることも多く、昨年NHKで放送された『サイレント・プア』は社会福祉協議会のコミュニティ・ソーシャル・ワーカー（CSW）にスポットが当たったので少し認知度が向上したように思いますが、この場をお借りしてソーシャルワークについて紹介します。ソーシャルワークは、「社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワーメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である」（IASSW）と定義されており、人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指し、その原理の中枢には社会正義、人権、集団的責任、および多様性を尊重しながら実践を展開していきます。また一方で、ソーシャルワークは生きづらさや暮らしにくさに関わる多様な障壁を取り除くための研究や実践を進めつつ、個人やグループのストレングスに焦点を当てたエンパワーメントを実践し、地域のソーシャルサポートの構築や社会的包摂を促進しながら社会変革に取り組んでいます。

最近、日本においても生活困窮者、一人親世帯の貧困、貧困の女性化、若者の失業やホームレス、ひきこもり、高齢者の孤立化、ケア、DV、障害者の排除などの福祉課題が浮き彫りになっていますが、これらは決して他人事ではなく誰もが当事者となりうる身近な問題です。この背景にはグローバル化や利益追求社会の歪みが生んだ問題も少なくありません。今後、障害者や高齢者が輝いている社会を誰もが暮らしやすい社会の「新しいものさし」として捉え直すことも必要なのではないでしょうか。

これからも制度の狭間の問題や新たな福祉問題について開発的ソーシャルワーク、福祉と社会的連帯経済、エイジングと貧困、多世代連携、ケアのコミュニティづくり、エンパワーメント実践などをキーワードとして研究と実践を進めていきたいと思っています。

新任教員紹介 ○○○

熱帯農業微生物と環境リサイクル

松　元　　賢
（包括的生物環境科学コース）
（熱帯農学研究センター・地水環境保全部門）

2014年10月を以て九州大学熱帯農学研究センター地水・環境保全部門准教授として昇任し、2015年1月に九州大学大学院地球科学統合科学府包括的生物環境科学コースに着任しました松元賢です。よろしくお願いいたします。以前は、同センター熱帯作物・環境部門の助教として、本センターに所属している修士課程および博士後期課程の学生の研究・教育の指導に従事しておりました。

私の専門は環境微生物学です。九州大学大学院農学研究院の修士課程および博士後期課程では、植物病理学研究室に在籍しており、イネに病気を起こす微生物、特にイネ紋枯病の主な要因であるイネ紋枯病菌（リゾクトニア　ソラニ）と紋枯類似症を引き起こすリゾクトニア属近縁種の化学分類学的手法および分子生物学的手法に基づくリゾクトニア属菌の分類学的性状の解明に関する研究を行ってきました。リゾクトニア属菌は自然界で胞子を作らないため、一般的な糸状菌（真菌）の特徴として知られている胞子の形態による類別が困難であり、分類学的な位置関係が明確でないという問題がありました。私は、当時、まだ知られていなかった化学分類学的手法の一種として知られている脂質分析、中でも菌体細胞に含まれている脂肪酸の種類や組成に着目した菌体脂肪酸分析をいち早く糸状菌（真菌）の分類に取り入れ、脂肪酸の種類や組成比のデータを統計学的な手法を用いて解析し、脂肪酸分類によるリゾクトニア属菌の多様性に関する研究を行ってきました。当時、菌体細胞から脂肪酸を抽出するのは容易ではなく、その手法の簡便化と容易化に非常に苦労したことが思い出となっています。

九州大学熱帯農学研究センターの助教に採用されてからは、熱帯アジア、特に、ベトナムの水田で発生するイネ紋枯病菌をハノイ市およびホーチミン市の水田から広く分離し、ベトナム国におけるイネ紋枯病菌の発生状況およびベトナム分離菌の多様性に関する研究を行ってきました。また、ベトナム国ばかりではなく、中国、台湾、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマー、バングラデシュ国などを訪問し、イネ紋枯病のサンプリングを行うとともに病原菌を分離し、各国におけるイネ紋枯病菌の分類学的な性状を解析し、熱帯アジアの本病原菌の生物的な多様性について明らかにするとともに、稲作病害の起源と病原菌の獲得機構に関する研究を行いました。

また、熱帯アジアとは、海外学術振興会海外特別研究員としてベトナム農業大学、JICA短期専門家としてベトナムハノイ農業大学およびタイバック農林大学のプロジェクトに参画し、ベトナム国の農林水産業に関連する研究者との太いパイプ作りに深く関わってきました。近年はミャンマー国イエジン農業大学の若手教員を留学生として引き受け、熱帯・亜熱帯地域で広く生存している熱帯農業微生物の研究・教育の指導を行い、熱帯アジアの農林水産業に関わる若手の大学教員の資質向上につながるお手伝いをして来ました。このような形で、私は、リゾクトニアという熱帯・亜熱帯地域の土壌に生息する微生物、特に、農林水産業と深い関わりをもつ農業微生物と出会い、熱帯農学研究センターではさらに、熱帯作物の土壌に生息する環境微生物との深いつながりを形成していきました。

一方、産官学連携のプロジェクト研究にも現在関わっております。佐賀県にある製紙工場で発生する製紙汚泥は現在焼却処分に依存していますが、昨今の石油燃料の高騰と、排出される二酸化炭素による地球温暖化などの問題から、焼却処分から新たなリサイクル資源としての利用を模索した結果、稲作用の培土として製紙汚泥が利用可能であることを見いだしました。私は製紙汚泥の発酵・熟成に関連する微生物群の特定および製紙汚泥の分解作用に関連する微生物の機能面に関する研究を行っております。本プロジェクトを通じて、将来、熱帯アジアで予想される生活・産業廃棄物、特に、浄水汚泥や製紙汚泥といった人間の経済・生活と深く密接した廃棄汚泥のリサイクルシステムの確立に関する研究は、熱帯アジア地域の経済成長・発展と深く関わっていくことが予想されます。これらの環境微生物の教育研究に携われることに、幸運と感謝の念をもち、熱帯アジアの国々の経済発展に貢献できることを目指しています。

○○○ 受賞報告

著書の出版と第8回九州考古学会賞受賞

溝　口　孝　司
（包括的東アジア・日本研究コース）
（比較社会文化研究院）

0.
Mizoguchi, K. 2013. *The Archaeology of Japan: From the Earliest Rice Farming Villages to the Rise of the State.* Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-371.（ISBN 9780521884907）

上記は2013年11月に出版された。2014年11月、私は、本書の執筆業績により、『第8回九州考古学会賞』を受賞した。

1.　本書の紹介（オフィシャル・バージョン）

本書はCambridge World Archaeology Series（Series Editor: Professor Norman Yoffee）初の日本考古学に関する書物である。筆者は弥生時代・古墳時代を対象として統一的理論体系に依拠した本格的歴史叙述を目指した。

本書はPart 1: Frameworks（枠組み）、と、Part 2: Trajectories（歴史過程の軌跡）の二部から構成される。

第一部、第一章においては、弥生時代・古墳時代が、考古学的認識・一般市民の心象風景の両者において占める位置とその含意についての検討がなされ、両時代の研究・歴史叙述において留意されるべき諸点が析出される。第二章においては、それを承けて、弥生時代・古墳時代研究史が検討される。その際、両時代研究が埋め込まれてきた研究環境・社会構造の変動との相関性に焦点があてられ、近代領域国民国家としての日本がたどってきた歴史軌跡と両時代研究史との間に、その問題意識、目的、方法・理論のそれぞれにおいて密接な相関性があることを具体的に指摘する。第三章においては、前二章の検討結果をふまえ、研究方針の定立と、分析・研究対象・資料の範囲とその性格の確認、位置づけがなされる。歴史叙述遂行にふさわしい編年軸についても検討・確認される。最後に、本書でめざされる歴史叙述のために最も適切な理論的枠組み（コミュニケーションの再生産メカニズムとその変容に焦点をあてた社会システム理論）が確立・提示される。

第二部当初の第四章においては、当該時期の環境と変動様態、また東アジア史の流れが、本書分析との関連・歴史事象との相関性においてアクセントづけられつつ記述される。第五章（弥生時代開始期・弥生I期）においては、水田稲作と、関連する文化－社会的複合の導入がもたらした生活世界の変容の具体像が分析・記述される。第六章・第七章（弥生II－V期）においては、水田稲作の拡散と、導入各地域における文化－社会的適応のもたらした人口増大等にうながされた社会の複合性の増大が種々の調整機能の発達をもたらし、共／協同性に依拠した社会構造の再生産メカニズムが、血縁集団を単位とする成層秩序に依拠するそれへと移行するプロセスを検討する。第八章（弥生VI期／庄内式併行期～布留式最古相段階）においては、そのようなプロセスの帰結としての相互交渉の広域ネットワークの形成が、近畿中枢部の中心性の析出として結果する具体像をフォーマル・ネットワーク分析の手法を用いつつ解明する。第九章・十章（古墳時代前半期・後半期）においては、近畿中枢部主導の地域統合体間関係の成層化が地域内成層の安定深化を促すとともに、諸種物財流通コントロールを媒介とする近畿地方中枢部からの各層への関与・介入の増大が同時に近畿中枢部の政治機構の機能分化の進展を導く様相、それが、さまざまな位相の祭祀等によって表象・コントロール・正当化されてゆくプロセスを記述する。第十章では、このような過程を経て、国家とよばれるにふさわしい機能分化と安定性を得るにいたった社会秩序の再生産メカニズムの具体像について検討する。

最終章の第十一章では、このようなプロセス全体を、社会的コミュニケーションシステムの規模・複雑性の増大と相互矛盾の適応的解決の連鎖にともなう長期的変容過程として俯瞰し、世界史的視座における初期農耕社会から国家形成への一モデルとして提示し、その特質につき論述して本書を総括する。

2. 本書の来歴（アンオフィシャル・バージョン）

月並みなことを書き記そう。この本を書き始めたのは2007年の夏。2013年11月の出版までに6年以上の月日がながれた。その間、いろいろなことがあった。だんだん研究時間・執筆時間が確保できなくなった。最後は地下鉄・筑肥線のなかで（も）書いた。伊都キャンパスから箱崎キャンパスへの移動があるときには、伊都を少し早く出て、市内某所のスタバで書いた。来る日も来る日も、一回にときに数行、ときに数パラグラフ、ときどき

数ページ、書いた。もうだめだ、と思いながら書いた。やった、と思いながら、書いた。弥生時代、古墳時代に身を置く気持ちで書くときもあれば、未来にこれを読む人たちの空間に身を置く気持ちで書くときもあった。それぞれ異なる時間と記憶の系列が、複雑な地層のようにからみあい、堆積していった。キーボードをたたく。スクリーンに文字が並んでゆく。頭のなかにあらかじめあったものが書き出されるのではない。なにか、確たるものとしては存在しなかったものが、ぎしぎしときしみながら、生まれていった。【資料を集め、分析し、パターンを析出し、(因果的に)意味付ける、そして、他の資料の分析から析出されたパターンと、その異なる観点からの意味付けの結果との対比を通じて、その有意性を検証する】: そのような作業があらかじめ実現していても(科学である以上、それは常に実現されているべきだ)、「書く」という<場面>が立ち上がるとき、それは、そのような作業・営為とはまったく独立した、「自律的」な、なにか。そして、そのような自己運動する空間のなかで、<僕>が書いているのか、<何か>から書かされているのか、それとも、実は、<僕>ではなくて、その<何か>そのものが書いているのか、わからなくなることがあった。そして、そうして産み出された文章や図面たちは、次に「書く」という場面が立ち上がる時には、そこに断固とした<なにものか>として存在していて、<執筆機械(とでもドゥルーズ=ガタリなら言うのだろう)>の一部として、スクリーンを見つめ、キーボードをたたく僕に作用した。僕はそれに苦しめられ、励まされ、支えられた。6年以上の月日のあいだ、<僕>という存在の起伏は、この<執筆機械>と、それが産み出し続ける<何者か>とともにあった。いや、それらの間に明確な境界や切断は、きっとなかったのだ。だから、この本だけではなくて、僕がこれまで書いたその他の二つの本('An Archaeological History of Japan: 30.000 B.C. to A.D. 700' (University of Pennsylvania Press, 2002); 'Archaeology, Society and Identity in Modern Japan' (Cambridge University Press, 2006))は、僕にとって、ある意味、僕が認識するすべてのものと同様に(<僕>という心的存在にとっての<他者>という意味で)よそよそしく、しかし、長くつきあった人物のように親しい存在である。(といって、「親友」といったものでもないところが、複雑なところだが。)

3. これから

親しい存在は、難しい存在だ。お互いに依存もするが、お互いの問題点もよく見える。互いの存在の交錯は、いずれにせよ<何か>を産み出してはゆくだろう。できれば、その<何か>はさらに何かを産み出し、できればそれが関わりを持つ人々と世界に、なんらかの良きものを産み出すようなものであってほしい。

最初の本は、歴史叙述だった。その次の本は、ある現象把握のための理論の洗練と応用だった。今度の本は、また歴史叙述だった。三冊の親しいものたちは、次は理論の順番だね、と言っている。親しいものたちといっしょに産み出した世界を超えてゆかなければいけないし、そうできたらと思う。

5. 謝辞

このような月日を通じて、私を支えていただいたすべてのみなさまにあつくお礼申し上げます。ありがとうございました!

アメリカ考古学協会(Society for American Archaeology)2014年度総会(テキサス州オースティン)のケンブリッジ大学出版局ブースにて著書を手に。左からProfessor Chris Scarre(英国ダーラム大学)、Ms. Jo Dean ('Antiquity'誌 Editorial Manager)、Professor Lord Colin Renfrew(英国ケンブリッジ大学)、溝口2014年4月撮影

○○○ 自著を語る

中国での出版
−拙著『新見歐陽脩九十六篇書簡箋注』−

東　英寿
（言語・メディア・コミュニケーションコース）
（比較社会文化研究院）

中国文学を研究している筆者にとって、本場の中国で書籍を刊行できる機会を与えられることは非常に喜ばしく、またありがたいことでもある。

このたび、上海古籍出版社よりオファーがあり、洪本健氏と共著で『新見歐陽脩九十六篇書簡箋注』を刊行することができた。

私は中国文学の中でも特に宋代文学に関心があり、2011年10月の日本中国学会において、宋代の文人である歐陽脩（1007～1072）の書簡を新たに96篇発見したことについて研究発表を行った。96篇の書簡の存在はこれまで全く知られていなかったので、中国国営通信・新華社が速報し、長江日報や遼寧日報、広州日報、香港文匯報等の多くの中国の新聞に記事が転載され、さらに人民日報や光明日報の東京支局長が取材に来て、それぞれの新聞に記事が掲載されるなど、中国で大きな反響を呼んだ。その際、上海古籍出版社からも連絡があり、同出版社が刊行する雑誌『中華文史論叢』に96篇について紹介する文章を執筆して欲しいと要請された。その論文は2012年3月の『中華文史論叢』に掲載されたが、それが縁で今回書籍を刊行する運びとなった。

本書は、箋注部分を中国の歐陽脩研究者である洪本健氏が担当し、私は新発見の96篇について、どこに存在していたのか、なぜこれまで発見されなかったのか、現在まで如何に流伝してきたのか、どのような特色があるのか、そしてこの発見はどのような意義を有するのか等を論じ、さらに96篇の書簡の語句を整理して詳細に校訂した。

出版に当たって、上海古籍出版社より契約書が送られてきた。それによると初版は1500部。本書は2014年6月に出版されたが、半年後の12月には売り切れたので再版となるという連絡が来た。このような専門的書籍が、かくも早く再版決定となるのは異例のことだそうである。

ところで、中国での出版といえば、2005年に拙著『復古與創新—歐陽脩散文與古文復興』（上海古籍出版社）を刊行した。日本で宋代文学を研究している学者6名が選定され、そのうちの1人として選ばれたので、「日本宋学研究六人集」というシリーズの一冊として中国で出版された。初版は1500部であった。こちらは9年間かかったが、昨年上海古籍出版社から再版になるという連絡が届いた。私の研究論文集が中国で1500部も売れたことに感謝しつつ了解したところ、装丁を全く新たにして、私の経歴と2005年当時に送っていた顔写真を、なんと表紙に掲載した拙著が再版された。

装丁をこのように大きく変えることについては、事前に全く知らされていなかったので、中国の出版社の大胆さに感心するとともに、想定外の装丁!!に驚いた。もっと映りの良い写真を送っておくべきだったと思った。

1μmの生命から地球を科学する

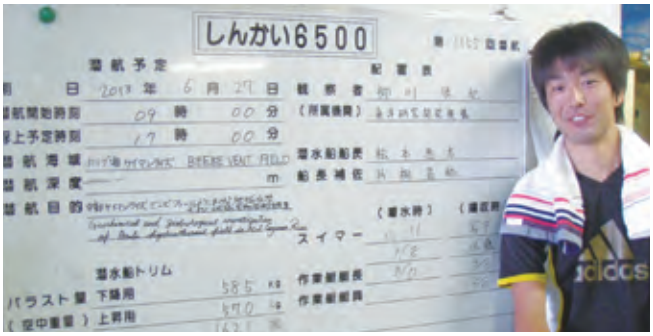
柳　川　勝　紀
（高度グローバル人材養成プロジェクト
学術研究員）

微生物の星、-地球

生命の満ちあふれるこの地球上で、最も繁栄に成功している生物は何だと思いますか?ヒトや昆虫という意見もあるかもしれませんが、「微生物」はどうでしょう。地球上で、微生物（とくに原核生物）の存在しない、いわゆる無菌環境を探すことは極めて困難です。100度を超す高温環境、暗黒かつ高水圧の深海、地上や海底から数kmに渡る地下圏など、多くの生物が生息不可能な環境であっても、微生物は存在できることがここ20年の研究で次々に明らかにされています。その生息範囲もさることながら、その数はさらに驚愕です。地球は、3×10^{30}もの微生物が生息している、まさしく「微生物の星」なのです。私は、この1μmほどの小さな生命体に魅せられて、陸上温泉、深海の海底温泉、メタンハイドレート、さらにその下の堆積物（海底下生命圏）などの極限環境を対象に研究を進めています。フィールド調査のために、国内の研究調査船はもちろん、フランスやドイツの研究船にも乗り、国際共同研究を展開しています。

深海の温泉

我々が精力的に調査を行ってきた研究調査地の一つが中部沖縄トラフの深海底にあります。そこは、生命誕生の場として期待される熱水噴出孔（海底温泉）が多数存在しています。これまでの研究で、熱水噴出孔の下には始原的生態系の「巣」が広がっていると予想されていました。2010年に実施された統合国際深海掘削計画第331次航海 では、その前人未踏の世界「熱水孔下生命圏」に直接アプローチすべく、科学掘削船「ちきゅう」を用いた海底掘削が行われました。私も乗船研究者の一人として参加し、貴重な掘削試料を手に入れ、未知なる生態系の解明に着手しています。これまでに、メタンを消費することのできる未培養性の好熱性アーキア（古細菌）の一群が優占することが明らかになっています。また、昨年はカリブ海まで赴き、世界最深の熱水噴出孔の調査を行いました。調査には、前所属先である海洋研究開発機構の所有する「しんかい6500」が使われます。私も乗船の機会を頂き、水深5000mの世界を自らの肌で体感しつつ、400度を超す超高温熱水の採取を行いました（写真）。



（日本の誇る有人潜水調査船「しんかい6500」でカリブ海の水深5000mに潜航しました！）

○○○ プロジェクトレポート

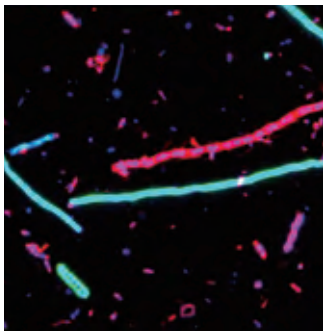
海底熱水系は地球—生命相互作用を読み解く上で貴重な場所であり、また海底鉱物資源の観点からも重要です。陸上には黒鉱鉱床と呼ばれる希少金属を高品位で含む鉱床が知られていますが、熱水鉱床も同様の資源として期待されています。ここでの元素の濃集過程は微生物活動の影響も考慮すべきでして、今後の課題です。

燃える氷、メタンハイドレート

深海底にはさらなる有用資源が眠っています。その代表格、メタンハイドレートは次世代エネルギー資源として、今や世間一般に認知されていることと思います。特に、日本海はその濃集帯が比較的浅い海底下に、広範囲で存在する為、頻繁に報道されています。我々は、このメタンの生成と消費に微生物が深く関与することを突き止め、現在更なる調査を進めているところです。メタンには二酸化炭素の約20倍の温室効果があるので、地球規模でのメタン循環と微生物の役割を知ることは重要な課題です。

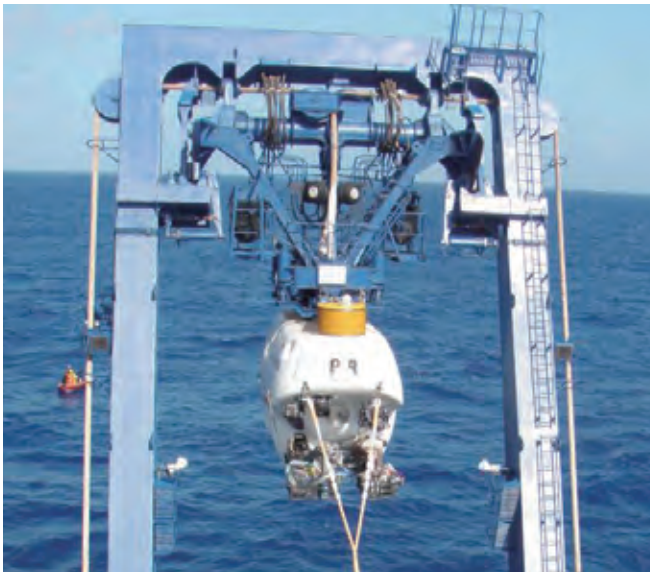
学際融合に向けて

このように、微生物は生物学のみならず、地球科学や資源・環境問題を含めた学際研究から追求すべき課題を次々と投げかけてきます。最近は、人骨の化石微生物DNAを使った研究にも誘惑されています。狙い通りにいけば、古病理学を通じた考古学との文理融合が実現するかもしれません。これらのことから、比較社会文化研究院は私にとって最適の環境と言えます。最後になってしまいましたが、私は「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」に基づいた教育の国際化支援と学際融合研究が求められる学術研究員として、比較社会文化研究院に7月からお世話になっています。現在は炭酸凝集同位体の分析を狩野彰宏教授と共に進めています。この分析で、地質時代に遡って過去の温度を知ることができます。応用が進めば、前述のメタンハイドレートを構成するガスの生成環境を推定することも可能になります。プロジェクトを通して得られた経験を自身の研究にも還元し、ゆくゆくは微生物というツールを通して様々な学問の橋渡しを実現させたいと考えておりますので、温かい目で見守って頂けると幸いです。どうぞよろしくお願い致します。



（左）熱水噴出孔に生息する微生物を特殊な方法で染色
赤：バクテリア、緑：アーキア
（右）日本海で採取されたメタンハイドレート

ちきゅうのやぐらの上で、乗船研究者と記念撮影



カリブ海に潜航するしんかい6500

狩野研究室で調査を行っているスマトラ島（インドネシア）の温泉

中国・山東大学への訪問と学術交流会を実施して

写真　山東大学周辺の街並み

海外実地調査派遣中国チーム
阿部康久
李　暁燕
（比較社会文化研究院・社会情報部門）
秋吉　収
（言語文化研究院・国際文化共生部門）
林　心泰
（高度グローバル人材養成プロジェクト
テクニカルスタッフ）

中国・山東大学への訪問

2014年10月21日から28日にかけて、秋吉収先生、李暁燕先生、テクニカル・スタッフの林心泰さん、報告者の4人のメンバーで中国・山東大学外国語学院を訪問し、部局間協定締結のための情報収集・交換学術交流と学術交流を行ってきました。

中国・山東大学は、中国では985工程（全国で45校が指定）と呼ばれるプログラムに指定されている国家重点大学の1つであり、中国国内の各種大学ランキングでは例年、概ね国内で10位台の順位にある大学です。中国には2,000校以上の高等教育機関（日本の約3倍）が存在することを考慮すれば、国内では非常に高い評価を受けているといえます。しかも、一般的な大学ランキングでは評価のウエイトが低くなりがちとされる人文社会科学の分野での研究において評価が高い大学だと言えます。

全学レベルでみると、九州大学は北京大学・清華大学をはじめとする中国大陸の23の主要大学との間で、既に全学協定を締結しているのですが、この山東大学と本学府（および比較社会文化研究院）が既に部局間協定を結んでいる華東師範大学は、主要大学の中で、まだ全学協定を結んでいない数少ない大学だと言えます。そのため、同大学と研究・教育の両面で交流を行っていくことは、本学府の国際交流や学術研究、さらには優秀な受験生の確保のために有益だと考え、今回、海外実地調査派遣チームに応募させて頂き、同大学を訪問することになりました。

今回の訪問に際しては、李暁燕先生が、1年前からカウンターパートを務める山東大学外国語学部日本語学科長の邢永鳳先生と交渉を行って下さっていました。邢先生は筆者とも面識があり、以前にも調査研究のために多くの助力を受けたことがあります。また外国語学院から本学を訪問されたことがある研究者として郭海紅准教授がおられ、2011年8月より1年間、比較社会文化研究院にて訪問研究員として滞在し、報告者と交流を行ったことがあります。そのため、具体的な内容は省略せざるを得ないのですが、今回の交流活動の実施に際しても、山東大学側から多くの御助力と御支援を頂くことができました。

10月21日に福岡空港から韓国仁川空港経由で大学がある済南市に到着しました。済南市は、1億人弱の人口を擁し、中国でも2番目に大きな省である山東省の省会（省政府所在地）です。中国では直轄市（北京、上海、天津、重慶の4都市が指定）に次ぐ副省級市（全国で14都市が指定）の1つに指定されています。北京や天津、青島などの他の大都市にも近く、北京までは高速鉄道にて最短1時間30分程度で行くことができます。航空便については、あいにく福岡からの直行便はないのですが、それでも仁川経由にて4時間弱で行くことができるので、今後も継続的に交流を進めていく上で、時間的にもかなり便利な地域・大学だということが実感できました。

山東大学での学術交流会

10月22日には午後2時より、学術交流会が開催されました。急な開催であったにもかかわらず、山東大学の教員・大学院生を含めて30人程度の参加者がありました。予定時間を大幅に超過して、4時間近くにわたって、活発な報告と意見交換が行われるほどの盛況な交流会でした。発表者とタイトルは以下の通りです。

阿部康久（九州大学）「日本で働く中国人　中国で働く日本人―福岡と上海でのインタビュー調査から―」

○○○ プロジェクトレポート

宋成徳（山東大学）「万葉集の歌と仏典の表現」
李暁燕（九州大学）「多文化グループワークによる言語文化統合教育の試み」
李金蓮（山東大学）後置詞「を通して」「を通じて」と中国語の介詞“通过”についての比較研究
秋吉收（九州大学）「“中日友好”歴史の一側面―語学学習の観点から―」
呉松梅（山東大学）「『源氏物語』幻巻の光源氏と元稹の悼亡詩」―「三遣悲懐」と「離思五首　其四」を中心に―」

写真　10月22日に開催された学術交流会の模様

山東大学側の発表はどれも高い水準であり、近年、中国の学術研究の水準が向上している状況を実感させられるものでした。九州大学側の発表では、李暁燕先生の報告は、近年の知識論の研究成果を、日本語教育の実践研究に適用した興味深い内容でした。また秋吉先生の発表は、今回の交流会のために、あえて新たに準備して下さった（と思われる）もので内容的にも興味深いものでしたが、加えて、流ちょうな中国語で報告して下さったため、中国側の参加者は、大いに関心を持って下さり、質疑応答の際にも、当日の交流会の中でも、最も盛り上がりが見られました。阿部（康）の報告はともかくとして、他のお二人の報告は、山東大学の出席者には、地球社会統合科学府の研究活動の活発さと水準の高さが十分に伝わる内容であったと思われます。

学術交流の今後

翌23日には、外国語学院長の王俊菊先生も出席され、今後の学術交流の進め方や部局間協定締結に向けた意見交換会を開催いたしました。林さんの適切な通訳（特に阿部の発言を通訳するときには、実際に話した内容よりも、遙かに魅力的でありながら、かつ誇張にならない程度の抜群な中国語表現に変換されていたように思います）のおかげもあり、九州大学と地球社会統合科学府の魅力は、先方にも十分に伝わり、今後も学術交流を行きながら、部局間協定の締結を進めていくということで合意することができました。

24日以降は、帰国便の都合もあり（あいにく帰国便については10月28日まで済南発の便が満席だったため）、それぞれのメンバーが青島や北京に移動して別行動をすることになりました。今後、継続的に学術交流を進めていくためには、近隣の大学の研究者にも協力して頂く必要もあるため、秋吉先生と李先生には、青島大学や山東師範大学などを訪問して頂きました。また阿部（康）は、山東大学側の勧めを受け、山東大学

写真　意見交換会の前に、外国語学院玄関にて学院長の王先生・日本語学科長の邢先生らとの記念写真

の大学院生らと中国を代表する思想家である孔子に関する史跡がある曲阜を訪問し交流を行ったほか（写真参照）、本学府の受験を希望する学生への個別相談を行うなどの活動を行いました。

写真　孔子の出身地曲阜市にて

今後の学術交流の計画としては、具体的には2015年3月頃、山東大学側の教員3名程度が本学を訪問し、学術研究会を開催することになりました。ちなみに、この訪問については、地球社会統合科学府国際協調安全構築コースの先生方の御理解・御協力により実現することができたものであります。この場を借りて同コースの先生方の御協力に心より御礼申し上げます。

また今後とも、既に交流協定を締結した華東師範大学と同様に、山東大学との交流活動にも、御協力・御支援を賜りますよう宜しくお願いいたします。　（文責　阿部）

「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」スリランカ実地調査の報告

（キャンディの市街地）

海外実地調査派遣スリランカチーム
小山内康人
荒谷邦雄
舘卓司
中野伸彦
（比較社会文化研究院・環境変動部門）
笹原純子
（高度グローバル人材養成プロジェクト
テクニカルスタッフ）

はじめに

2014年11月、特別経費「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」による海外実地調査チーム派遣事業の一環で、スリランカへ訪問いたしましたので報告させて頂きます。

今回の実地調査では、スリランカ中部州の州都であるキャンディに位置するペラデニア大学を訪れ、比較社会文化研究院ならびに地球社会統合科学府と同大学理学部および農学部との部局間交流協定と学生交流協定の締結を目指した具体的なプランニングを実施するとともに、本プロジェクトの核となる招へい事業も含めた継続的な国際共同研究や交流の可能性について議論することを主な目的とし、本学府から上記5名の教職員が現地へ赴きました。

ペラデニア大学への訪問

ここで、ペラデニア大学について簡単に紹介させて頂きます。同大学は1942年7月にセイロン大学として首都コロンボに創立され、現在では8学部を有するスリランカ最古かつ最大規模を誇る国立総合大学であり、名実ともに同国の研究・教育のトップとして同国の発展を支える人材養成の最重要機関です。

（ペラデニア大学）

今回訪問した理学部は、1942年のセイロン大学創立と同時期に設立され、その後約70年間スリランカにおける理学分野の研究教育の発展を支えてきました。現在、同学部は地質学など計8学科を有し、学生約2,000名を抱えています。

滞在3日目に、同大学のDepartment of Geologyにおいて、部局間交流協定に関する打合せが行われました。同大学Vice ChancellorであるProf. Atula Senaratnaおよびコン

○○○ プロジェクトレポート

タクトパーソンのDr. Sanjeewa Malaviarachchiを始め、学部長やセンター長など計6名の教員が同席し、協定締結に関する具体的な議論がなされ、双方の認識の統一を図るために実務レベルでの打合せが行われました。

併せて、同大学農学部のDr. Devika M. De Costaとも積極的な議論がなされ、今後は理学部に続いて農学部とも継続的な交流を行っていくことが期待されます。

（ペラデニア大学、Department of Geology）

（部局間交流協定に関する打合せの様子）

スリランカは、宗教対立や自然災害からの復興、鉱物資源や森林資源の持続的利用等を題材とした人文・社会分野をも統合した学際的な教育・研究を実践できる地域であることから、ペラデニア大学との継続的な交流および共同研究の実現により、本プロジェクトが主として掲げる高度グローバル人材の育成に大きく貢献でき、本研究院および本学府の更なるグローバル化に寄与することが期待されます。

ペラデニア大学周辺地域の調査

また、今回の派遣でのもう一つの目的であるペラデニア大学周辺の地域における宿泊・研究施設、アクセス、安全面等の調査を実施するため、近郊地域（Kandy,Sigiriya,Dambulla, Nuwara Eliya）も訪れ、ペラデニアからのアクセス状況および治安状況についても確認しました。今後は同大学との協定に基づく派遣学生の増加や、国際共同研究の活発化が想定されるため、学生を派遣する状況を考慮しての調査でしたが、足を運んだ全ての地域において、研究や実習の実施場所として十分に機能していることを確認しました。また、スリランカは基本的に熱帯性という気候でありながら、年平均気温22℃と年中春のような気候である標高約1,890mのヌワラ・エリヤや乾燥地帯と湿潤地帯に大別される国土、また、セイロンティーや茶の生産が盛んであるなどの地理的特色などを総合的に鑑みても、共同研究だけでなく、学生派遣の交流を含めた点においても総合的に興味深い地域であるといえるでしょう。

（Nuwara Eliya）

おわりに

さて、この場を借りてスリランカ派遣に関する報告をさせて頂きましたが、これまで述べたように、名実共に実績のあるペラデニア大学との関係をさらに強化し、同大学との積極的な交流、および協力体制の構築に対する可能性について実のある議論を行い、将来的な関係性の発展を実感することができました。

今回の派遣が、協定締結という結果のみに止まらない、積極性のある強力な関係を築くきっかけとなることを期待し、今後の本プロジェクトおよび本学府のグローバル化に大きく寄与することを期待しています。（文責 笹原）

（Vice Chancellor Prof. Atula Senaratnaによる記念品贈与の様子）

【フューチャーアジアプログラム　平成26年度活動報告】

本プログラムは、産学官民の連携による、地球社会的視野に立つアジア・イノベーション人材の育成を目的とする博士課程教育プログラムです。

アジアは、21世紀の半ばまでに世界経済のセンターに成長すると予想されていますが、他方で、経済格差の拡大や高齢化の進行、国境紛争や資源獲得競争の激化、気候変動や環境問題などの国境を超えた課題の深刻化など、さまざまな問題を抱えています。

このようなアジア広域秩序の急激な変容の中で、将来のアジアの安定と繁栄を率先して担うリーダー人材が求められています。

以上のような経緯から、未来のアジア創生（Future Asian Innovation）に貢献する人材の育成を目的としてフューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム（略称フューチャーアジアプログラム）は創設されました。

アジアでは、民族的・言語的・文化的多様性の幅が広く、基盤となる普遍的な社会原理や共通の宗教的伝統が、欧米世界のような形では存在していません。このような地域的安定の基盤の脆弱性という条件のもとでアジアの安定と繁栄を築くには、紛争や対立の種となるアジアの文化的経済的多様性を、アジアの安定と繁栄のための力へと転換することが求められます。多様性を力とするためには、個々の存在が互いを認め合い、相互に活かし合う関係を築かなければなりません。本プログラムは、このような共存型秩序の構築のために、地球社会的視野に立つアジア・イノベーション人材の育成を目指します。

以下、10月1日に一期生4名を迎えたあとの平成26年度の活動実績をご紹介します。

「フューチャーアジア研究I」では、特に統合学際型リーダーに不可欠な素養である「伝える力」「描く力」の養成を中心とした、伝えたい情報を的確に発信する能力を養成することを重視しました。

まず、アジアの将来像を描くために不可欠である社会や経済の変化をデータを通じて把握する能力を、自然科学分野やマーケティングの方法論としてのデータ活用（センサやソーシャルメディアに由来する大量かつ多様なデータを用いること）によって、世の中の現象を明らかにしようとする取り組みについて学びました。本講義では鈴木良介氏（野村総合研究所コンサルティング事業本部　ICT・メディア産業コンサルティング部　主任コンサルタント）より、研究を円滑にするためのデータの活用可能性と、その背景、先鋭事例を紹介して頂きました。

また、これらの膨大な情報を取捨選択し、具体的に思考を可視化する手法について学ぶことは、将来アジアで統合学際型リーダーとして活躍するためには不可欠です。その為に自身が発信したいと考える内容を深化させ整理する手法であるファシリテーション、ビジュアル・ミーティングの手法を平山猛氏（株式会社トライローグ代表取締役）より講義頂きました。

○○○ リーディングプログラムレポート

ビッグデータの活用による社会課題の解決（鈴木良介氏）

アジアフィールド研修

平成27年度に実施予定の「アジアフィールド研修Ⅰ、Ⅱ」に先立つプレ研修として「アジアフィールド研修・オリエンテーション合宿」を2月28日～3月8日に実施しました。今回の研修場所としてマレーシアのサバ州が選ばれ、事前講習会や講義を通じて海外研修での健康・安全管理等への注意を徹底するとともに、マレーシアに対する理解を深めました。また、各自で事前に探究したいテーマを設定し、研修に臨みました。

研修では熱帯の生物多様性の保全やその持続的利用について実感することを主目的とし、サバ大学、JICAオフィス、サバ州立博物館、オランウータンリハビリテーションセンター、レインフォレスト・ディスカバリーセンター、キナバタンガン川保護区、アブラヤシ・プランテーションなどを訪問し、コタキナバル市内では各自のテーマ探求を行いました。

研修期間中には野生の象、ワニ、猿、オランウータンを近くで見ることができ、貴重な経験となりました。また、JICAオフィスではボルネオ生物多様性保全・生態系保全プログラムについて学ぶことができ、国際的な協力の重要性やその中で日本が果たす役割を確認することができました。

アジアフィールド研修・オリエンテーション合宿

帰国前の2日間はプログラム生各自がそれぞれの専門に即した調査を計画し、実行しました。各自が目的地を決めて自主的に活動することで、実際に地域の方とふれあい、将来自分がどのような道に進むべきかについて考える手がかりを得ることができました。

海外研究者招へい事業

統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクトでは、海外研究者招へい事業の一環として12月～1月の期間に香港中文大学日本学研究所 北村隆則教授をチームリーダーとして、香港中文大学 Willy Lam教授、国民大学校 玄大松教授を招へいしました。

プログラム生は「フューチャーアジア研究Ⅰ」の講義として、海外研究者チームによる講義「現代東アジア国際論」に参加する機会を得ました。また、通常の講義のみならず、フィールドトリップとセミナーにも参加しました。

フィールドトリップ　新日鉄住金八幡製鉄所を訪問

12月12日実施のフィールドトリップでは北九州市および新日鐵住金八幡製鉄所を訪問し、環境汚染対策に対するこれまでの取り組み状況や成果、目標の達成状況及び国際協力の最新動向について学び、アジア地域における国家間での協力体制強化と促進の方法について考えるきっかけとなりました。

続いて12月18日に、伊都キャンパスの伊都ゲストハウスにて行われた「第1回　統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト特別セミナー　東アジア地域協力・地域秩序の未来」では、東アジア地域における地域協力・地域秩序の未来について、アジア統合についての最新研究動向と関連付け、最先端の研究をリードしてきた香港中文大学と国民大学校の研究者が共同のもと、中国と韓国及び多様な東アジ

ア領域における問題について異なる観点から検討・検証を行い、知識を結集させました。地域や学術分野の枠を超え、それぞれの知識を融合させることにより、わが国を含むアジアの将来について改めて再考することができました。

さらに、喫緊の課題である領土問題とアジア統合に、これらの知識と経験がどのように活用されるべきかについても学びました。

特別セミナー　東アジア地域協力・地域秩序の未来

第2回フューチャーアジア創生フォーラム開催

12月7日、「第2回　フューチャーアジア創生フォーラム　より良い世界の構築　～今求められるイノベーションとは～」をタカクラホテル福岡 メインバンケット「宝珠」にて開催しました。

本フォーラムでは「フューチャーアジア連携プロジェクトI」の講師でもある北浩一郎氏（株式会社LbE Japan代表取締役）をファシリテーターとしてお迎えしました。プログラム生はワークショップリーダーとして、初めての経験ではありましたが、多様なバックグラウンドとそれぞれ異なる意見をもつ4人のゲストスピーカーと参加者を統率し、グループディスカッションをファシリテートすることに成功しました。

その結果、「いかにして協働のもと、より良い世界を構築（クリエイト）していくことが出来るか」というフォーラムのテーマについて活発な議論を交すことができました。

特別ワークショップ開催

「フューチャーアジア連携プロジェクトI」では鈴木優人氏（指揮者,作曲家,ピアニスト,チェンバリスト,オルガニスト）／平田オリザ氏（演劇家・劇作家）による特別ワークショップ「文化で語るアジアの未来　演劇と音楽を通して見るアジアの可能性」をそれぞれ2月11日、2月16日に開催しました。

鈴木優人氏によるワークショップでは、最も社会的な演奏形態と言われるオーケストラと指揮者の関係からリーダーシップのありかたを学びました。しばしば国家元首や企業のトップなどに喩えられる指揮者は、どのように演奏者に意思を伝え、どのようにして背を向けた聴衆と対話するのか。九大フィルハーモニー・オーケストラの協力のもと、受講生自ら指揮台に立つことでリーダーの特異な役割を実体験しました。

また鈴木氏は、プロデューサーとして音楽祭を率いる立場から垣間見える日本の文化行政の現在と今後の展望についても紹介してくださいました。

平田オリザ氏によるワークショップでは、コミュニケーションゲームと呼ばれる基礎的なワークショップを経験することで、演劇がもたらす異文化コミュニケーションへの効果を体を通して学びました。同時に、現在の日本のグローバルコミュニーション教育の問題点についても紹介して頂き、大変好評を博しました。

フォーラム　グループディスカッションの報告を行うプログラム生

フォーラム　ゲストスピーカー

○○○ リーディングプログラムレポート

2014/12/7 フォーラム

2015/2/11・16 特別ワークショップ

2014/12/18 特別セミナー

【フューチャーアジア研究I】

講 義 名	講師(敬称略)	キ ー ワ ー ド	開 講 日
研究手法 実践演習I	鈴木 良介	ビッグデータの活用による 社会課題の解決	2014/11/1
研究手法 実践演習II	平山 猛	ファシリテーション ビジュアル・ミーティング	2014/ 11/29,30
現代東アジア 国際関係論	北村 隆則 Willy Lam 玄 大松	地域協力・統合 Regional cooperation ナショナリズム	2014/12/6 ～2015/1/30

【フューチャーアジア連携プロジェクトI】

講 義 名	講師(敬称略)	キ ー ワ ー ド	開 講 日
グローバル・ コミュニケーション論	北 浩一郎	グローバル・ コミュニケーション 協働	2014/10/24 ～2015/1/9
都市空間 共生論I	西谷 郁	情報整理力と実践知識	2014/10/18
都市空間 共生論II	鐘ヶ江 進	集団統率力	2015/ 2/ 6
音楽を通して見る アジアリーダー シップ論	鈴木 優人	集団を率い、導く 外部への協調と 情報発信能力	2015/ 2/11
グローバル・ コミュニケーション 表現手法論	平田オリザ	コミュニケーション能力 プレゼンテーション能力	2015/ 2/16

■URL
フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム
Integrated-interdisciplinary program for leading future Asia innovation
URL http://isgs.kyushu-u.ac.jp/FutureAsia/

【フューチャーアジアプログラム第1期生】

福永裕美
地球社会統合科学府
国際協調安全構築コース
修士1年

福岡県福岡市出身の福永裕美です。学部時代は社会福祉について学び、社会福祉士を取得しました。現在は政治学を専攻し、都市部の低所得者層で起こる関係性の貧困を改善するための地域コミュニティ再編成について研究しています。

リーディングプログラムに参加したのは、通常の講義のみならず、現場で働く方々からの実践的な講義に魅力を感じたのがきっかけです。グラフィック・ファシリテーションの演習やコミュニケーションに関する講義は普段の研究活動にも活かすことができ、大変参考になりました。また、このプログラムに参加したもう一つの理由は、私は人前で話すことが苦手で、どちらかといえば消極的な性格なので、「統合学際型リーダー」になるための「6つの力」を養い、それを克服できればとも思いました。実際に、セミナーやグループワーク等、人前で話す機会をいただくこともありますので、大変ですが良い経験をさせていただいております。

今後は、フィリピンの貧困問題に興味があるので、プログラムで頂いた研究費で現地調査に行く予定です。現在、フィリピンでは格差が広がり、十分な教育を受けられない子どもたちが増えています。その子どもたちと実際に関わりながらどのような教育や支援が行われるべきなのか、その方法について学びたいです。日本で学んだ点をフィリピンで、またフィリピンで学んだ点を日本でそれぞれ活かすことができるように互いに学びあうことができたらいいなと思います。

毛　雪梅
地球社会統合科学府
包括的東アジア・日本研究コース
修士1年

中国四川省涼山彝族自治州の出身です。専門分野は文化人類学で、現在は20世紀涼山の彝族の風俗習慣と社会変動を研究しています。本研究を通して、20世紀前半の中国の二つの大きな政治社会変動が涼山彝族社会に与えた影響についてまとめ、それが20世紀後半の彝族社会のあり方にどのようなインパクトを与えたかについて展望したいと考えています。

修士課程に入学して1年余りですが、様々なリーディングプログラム体験授業を受講しました。例えば、4月に行われた井口奈保先生のワークショップの授業では、ファシリテーターと呼ばれる司会進行役の役割、具体的には、どうすれば参加者が積極的に作業や発言を行える会議を運営することができるかを学びました。今後、会議やセミナーなどを効率的に運営する上で、役に立つスキルを得ることができたと思います。また、女性エンパワーメントセンターと福岡県国際交流センターへの職場見学もたいへん興味深いものでした。一つのNPOを運営する背後に多くの困難があることを知り、これをきっかけに、自分も社会に役立つ人材になりたいと思いました。このような体験授業が豊富に用意されているリーディングプログラムに参加することができ、よかったと思います。

大学院での勉強の本分は研究ですが、机に向かう研究だけではなく、本プログラムで現場を体験することで、具体的な課題に取り組む力を身につけることができたように思います。以前の自分の視野がいかに狭いものであったかを実感し、修士1年の勉強を通して、本プログラムが取り組むアジアの未来に深い興味を持てるようになりました。アジアにおいては数々の環境問題、領土問題、資源問題などが生じています。どういうふうに平和的に解決できるかというのは大きな課題です。12月のプログラムの授業では、Willy　LAM先生、玄大松先生、北村隆則先生からアジアの地域秩序についての様々な見方が示されました。今後どういう動きがあるかを含めて、大きな関心を持つことができました。今後もプログラムのいろいろな授業や研修を楽しみにしています。私はプログラムが目指している6つの力（「統合学際力」、「専門調査研究力」、現場を「歩く力」、理解と対話のための「伝える力」、ヴィジョンを「描く力」、そこに向かって人びとを「率いる力」）を身につけ、これからも、自分の研究とプログラムに関する授業と研修を積極的に受けて、自分が学んだものを現場に生かしていきたいと思います。

○○○ 地球社会統合科学セミナー報告

第6回地球社会統合科学セミナー「アジアを生きる: 交流・移動・定着」を終えて

長　谷　千　代　子
（包括的東アジア・日本研究コース）
（比較社会文化研究院）

2014年6月26日（木）15:00～17:00、「アジアを生きる:交流・移動・定着」と題して、第六回地球社会統合科学セミナーが伊都キャンパスセンター2号館2403教室にて開催された。2014年4月に地球社会統合科学府が本格的に始動してから最初の地球社会統合科学セミナーとなった本回では、包括的東アジア・日本研究コースに新たに迎えられた教員のなかから、相澤伸宏、伊藤幸司、小川玲子各氏にご報告いただいた。日本とアジアの歴史と現在を包括的にとらえる研究を目指す本コースの野心的な企図にふさわしく、時間的にも空間的にもスケールの大きなテーマをあつかったセミナーとなった。

冒頭の古谷嘉章学府長による開会の辞に続き、伊藤幸司氏が「中世東アジア海域の船旅」というテーマで、主に15―16世紀の日本から明への使節船の航海の様子に焦点をあて、文献史学の手法による研究について報告した。主な資料は策彦周良らが当時明に渡った経験を書き残した日記などであり、そこから当時の航海技術や途中で出会うさまざまな困難などを読み取ることができるという。航海前には雑菌の湧きにくい水を供給できる井戸の確保が重要なこと、航路を確認するために付近の山や島影の地形に関する知識が必要なこと、それでも現在地が分からなくなったら異国の言葉を話す住民と筆談して聞き出すことなど、興味深いエピソードが紹介された。こうしたエピソードをもとに井戸の跡を訪ねたり、山や島の地形を確認したりして実証的事実を積み重ね、航路の全体像を割り出す地道な研究手法を例証する報告となっていた。

簡単な質疑応答に続き、二番目の発表者として相澤伸宏氏が「インドネシアの華僑華人政策と中国政策」について報告した。相澤氏が発表のなかで取り上げる時代は、海外との交通手段が船から飛行機へと変化する過渡期にあたる直近の100年である。東南アジアは華僑が多い地域であるが、これはかつての船の時代には、海に近い広東や福建から東南アジアへ移動することが比較的容易であったことに起因すると見られる。こうした歴史的経緯によって比較的大きな華人社会を国内に抱えたインドネシアにとって、中国の国際的プレゼンスの変化は国内の政治や社会・文化にも、日本人が想像しにくいほどの大きな影響を及ぼす。実際、1960年代後半には中国とインドネシアの政治的方向性の違いからインドネシア国内の華人社会は苦境に立たされたが、中国が改革開放へと大きく政策転換して経済成長が重視されるようになると華僑・華人の社会的地位も上昇し、現在は良好な関係が保たれている。今では飛行機という交通手段が発達したことで、移動するにも定住するにも一大決心する必要はなくなり、一国の内外を分ける心理的垣根が低くなる傾向が見られる。こうした時代の変化のなかでの生き方の模索というテーマは、華人を鏡としてわれわれが共有できる課題であろう。

最後の発表者は小川怜子氏で、「グローバル化するケア労働と移民」と題して、主に東南アジアからのケアワーカーを受け入れている日本と台湾を比較した報告がなされた。両国とも東南アジア、特にインドネシア、フィリピン、ベトナムから若い女性たちをケア労働者として受け入れているが、日本が高度人材に限定して医療・介護機関で労働管理しながら受け入れているのに対し、台湾は華人ネットワークの斡旋で非資格者を在宅勤務させる形態で受け入れる傾向が強いという。受け入れ条件を厳しくしすぎると必要な人数が確保できないという問題が起こるが、逆に安易に受け入れると訓練を十分に積んでいない人々を劣悪な労働条件で働かせてしまうことになりかねない。したがって有資格者が長期的に定住できる方向に制度を整備していくのが望ましいのではないかという提言もなされた。伝統社会ではかなり移動性の低かった若い女性が簡単に国境を越えられるようになった現代を象徴する研究課題であると言えよう。

こうした報告に対し、コメンテーターの阿部康久氏は、移動手段の多様化によって交流、移動がますます手軽になり、定住か移動かの条件が複雑化する状況があることを指摘し、コースの名前に謳われているように、包括的かつ学際的な研究が今後ますます必要とされると述べ、セミナーを締めくくった。

参加者は約50人で、フロアからの質問も終了時刻を超過するほど多数あり、意義深い時間を過ごすことができた。

第7回地球社会統合科学セミナー「多様性共存の可能性 ージェンダー・セクシュアリティ・クィアの観点からー」

GERMER Andrea & 眞野 豊
（社会的多様性共存コース）
（比較社会文化研究院）
（社会的多様性共存コース）
（地球社会統合科学府 博士後期課程）

多様性共存は、地球社会統合科学府が射程とする学際的課題の一つであり、今日の地球社会の諸問題を考える上でも重要なキーワードであると思われる。多様性共存の可能性を追求する際、ジェンダーと性的マイノリティをめぐる基本的な課題と要求が重要な意味を持つと言える。

そこで私たちは、本学の研究を紹介するセミナーシリーズ、地球社会統合科学セミナーの第7回のテーマとして「多様性共存の可能性:ジェンダー・セクシュアリティ・クィアの観点から」を設定し、共同開催した。

セミナーには、日本、アメリカ、ドイツ出身の発表者とコメンテーターが登壇し、それぞれの専門分野、政治、歴史学、社会学、自然人類学、芸術学、教育学などの観点からジェンダー・セクシュアリティ・クィアについて現状や多様性共存の可能性について学際的な議論がなされた。異なる分野、様々な立場からの多元的で学際的な議論は、多くの人々の関心を呼び、当日の参加者は約150名近くに上った。セクシュアリティやクィアをテーマに掲げた学際的シンポジウムの開催は、九州地方の大学としても初めての画期的なイベントとなった。

共催者の一人であるゲルマー・アンドレアは本セミナーの趣旨説明の中で、多様性共存と「他者性」というコンセプトから問題提起を行い、性的マイノリティの状況を検討することは、あらゆる他者性と多様性共存の問題に根本的につながっていると指摘した。具体的には二人の対照的な人物を取り上げた。一人は19世紀のフランスに生まれ自殺したインターセックスのエルキュリーヌ・バルバンであり、もう一人は2014年ユーロビジョン・ソング・コンテストで優勝したコンチータ・ヴルストである。異なる時代の対照的な二つの事例から、排外的な二項対立であるジェンダーと異性愛規範は決して固定的なものではなく、社会的に言っても歴史的に見ても常に変化するものであることを指摘した。

基調講演には、在福岡米国領事館のダニエル・C・キャラハン政治・経済担当領事が登壇し、政治家の観点から米国、日本、世界における性と人権について報告をしていただいた。この中でキャラハンは、現在のアメリカで進められている性的マイノリティに対する公的な受け入れを日本においても積極的に進めていく必要があると主張した。

セミナーの後半は3名の報告者がそれぞれの異なる分野から、ジェンダー・セクシュアリティ・クィアについてアカデミックな議論を展開した。

最初の報告者である本学府の瀬口典子は、自然人類学の観点から議論を展開し、性差というものが科学的な定義の中で、いかにその時代や社会の意識を反映しながら構築されてきたものであるかを説いた。人間の多様性に対する彼女の洞察は、固定したジェンダー観念や「本物・真実の性」という神話に疑問を呈し、本セミナーの主題に対する視野を広げることにつながった。瀬口はさらに、自然人類学史上のジェンダーバイアス、特に日本の自然人類学界に見られる国際的な知見を無視した古いジェンダーバイアスの再生産を問題にし、それがメディアを通して一般社会に流布し、固定化する仕組みを明らかにした。

○○○ 地球社会統合科学セミナー報告

二人目の報告者である芸術工学研究院の中村美亜は、芸術学の領域からアートとクィアについて論じた。人間を実際に人間たらしめているものの一つに「芸術を作り出す能力」を挙げることができる。芸術や創造性には、通常なものを越えたいわゆるクィアな観点から見ること（queering）が大切であり、性の規範を問題化する方法としてのクィアとアートは親近性が高い。中村は、多様性共存を考える一つの実践として、他者との「共振・共鳴」というアイデアを提案した。共振・共鳴を生み出すアートの例として、エイズをめぐるアート実践（メモリーワーク）を取り上げ、芸術が規範や“正常さ”の暴力を無効にし、癒す方法になりえることを提示した。

三人目の報告者は、もう一人の共催者である本学府博士課程の眞野豊である。眞野は、日本の学校教育を法的に規定している学習指導要領の記述が、異性愛だけを前提としたものであることを取り上げ、性的マイノリティの子ども達が現在の公教育の外側にいると指摘した。その結果、典型的なジェンダー規範や異性愛規範に合わない子ども達は、いじめ被害や不登校、自殺のリスクが高まる傾向にあり、学校が危険な場所となっていると指摘した。性の多様性を無視した教育は、性的マイノリティの子どもたちだけではなく、マジョリティの子どもたちが自分や他者の多様性について知る機会を失わせ、社会的、知的成長に決定的な影響を及ぼすことにもなる。

最後に行われた全体討論では、会場に集まった人々との質疑応答も交えながら議論が深められた。討論のファシリテーターは本学府の社会学者である三隅一人が務め、さらにコメンテーターとして、ジェンダー研究の専門家であるドイツボフム大学のイルゼ・レンツとゲイ・スタディーズ研究者である広島修道大学の河口和也が加わり、議論が深められた。

レンツは社会学的な観点から、ドイツにおける事例やアフリカでの同性愛迫害の事例を紹介し、異性愛者／同性愛者の境界線やその枠を超えた話し合いの必要性を説いた。さらに、本セミナーが歴史学、生物人類学、社会学、芸術学、教育学、政治など様々な視点が交差する場となっていることを指摘し、本セミナーの学際的意義を強調した。

河口和也は、3つの報告を踏まえて、ゲイ・スタディーズの観点から様々なカテゴリー、すなわちジェンダー、階級、エスニシティの交差性を論じた。具体的にはアメリカを例に挙げて、同性愛が認められるなかで、グローバル資本主義システムに取り込まれたり、他の政治的な問題への関心が薄れたりする危険性があることを指摘した。さらに、企業が行うダイバーシティマネージメントについても言及し、ダイバーシティの導入が労働者のためではなく、企業側の論理のみに回収されてしまうことの危険性について言及した。

会場の人々からもいくつかの重要な問いや指摘がなされた。その一つは性的マイノリティの人権運動と政治的な利用に関する危惧である。性的マイノリティの人権問題が国家間の闘争に利用されたり、軍隊の中で認められたりすることによって、性的マイノリティが暴力に加担する可能性がある。単に「多様性を認める」というだけでは暴力的なものまで認める思考が入り込んでくるという懸念も述べられた。

また、同性婚の実現に対する要望についても、結婚制度そのものがもつ排他性について十分な議論がなされないまま推し進められることによって、新たな暴力が生まれるのではないかという声もあった。

セミナーの最後にファシリテーターを務めた三隅からは、多様性共存を前提に考えるときに、何を選び取り、どこに境界を引くのかという攻防、すなわち「差異化と連帯」をどう両立するかが課題であるとの指摘がなされた。さらに、こうした問題を私的な領域から公共の領域に移動させていかなければ問題が解決されないと指摘し、そのためにどのようなサポートが可能なのかは今後の重要な課題であるとした。

セミナー終了後にとったアンケートには「どの話もわかりやすく、刺激を受けた。もっと聞きたい。」という内容の感想が多く見られた。中にはセミナーに参加したことで「勇気をもらった。前向きに前進していきたい。」という感想もあった。

多様性共存は、長い間「問題」として語られてきたが、今回のセミナーでなされた議論を振り返ると、今まさに、平等を本格的に実現し、多様性を歓迎する時期が来ているのではないかと思われる。

最後に、本セミナーを実現できたのは、登壇者の方々の協力の他に、ポスターを作成してくれた本学府修士課程のPandaさんをはじめ、多くの学生の協力があったからである。本セミナーに協力してくれた方々に改めて感謝を申し上げる。

第8回地球社会統合科学セミナー「市民の心・民族の魂―ヨーロッパ歴史意識の普遍性と個別性」の開催

松　井　康　浩
（国際協調・安全構築コース）
（比較社会文化研究院）

新学府の広報を兼ねて重ねられてきた「地球社会統合科学セミナー」も、2014年10月8日開催の本企画をもって8回目を数えた。地球社会統合科学府の目玉の一つは、日本や東アジアの現在に様々な分野・方向からアプローチする多数の教員を擁していることにあろう。これまでに開かれた本セミナーの多くも、その目玉を打ち出したテーマが比較的多かった。とはいえ、「地球社会」をフィールドとした「統合的学際性」に基づく教育研究をうたっているように、本学府は、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカから南極大陸にいたる地球大に広がる地域を対象に現地調査を敢行する多数の教員を揃えている。第8回目の本セミナーでは、その中から、ヨーロッパの歴史や思想をフィールドとする教員が報告者となった。長く日本が学ぶべきモデルに位置付けられ、膨大に蓄積された学術的成果に加えて新たな知を生み出し続けるヨーロッパに学ぶ意義は、いまなお大きいものがあるはずだ。

本セミナーの主題に掲げられた「市民」と「民族」が、ヨーロッパにその起源の核を有し、その地で長く体系的に論じられてきた言葉であることは間違いない。グローバル化が、否応なしに知や現実の世界を席巻する今日、その動きに埋め込まれた普遍性と個別性を読み解く作業は欠かせないが、市民と民族はいずれも普遍性と個別性の双方に開かれている。グローバル市民が一方で語られながらも、ナショナリティに固く結び付けられた市民の現実があり、独自の文化や言語、歴史や伝統に基づくとされる民族を政治の単位に一致させようとするネイション自決の動きは、20世紀後半の植民地体制の崩壊以来、とめどもない普遍性を示してきたからである。

本セミナーでは、地球社会統合科学府の3人の教員のなかで嶋田洋一郎氏が18世紀を、鏑木政彦氏が19世紀を、私、松井康浩が20世紀を対象にした。また、地球社会統合科学府に改組する前の比較社会文化学府を修了した白川俊介氏、地球社会統合科学府博士後期課程の仲井間健太氏に討論者をお願いした。ベテランの域に入る3教員の報告に対し、伸び盛りの若手研究者が立ち向かう構図である。以下、各報告の内容とそれに対する質疑の模様の一端を紹介しよう。

「ヘルダーと18世紀ヨーロッパ　―『旅日記』を中心に」と題した嶋田報告のキーワードはVolkとNationalismusである。王侯貴族を頂点とする身分制社会の中で、「Volk」は「庶民」として身分的には底辺に位置するものと考えられていた。こうした状況で、ヘルダーが「市民」の実体として期待したのはこの「Volk」であった。他方ヘルダーにおいてNationalismusというドイツ語は宗教との関連で現れた。すなわちこの言葉は、ユダヤ人の宗教であるユダヤ教との関係で用いられており、ユダヤの民（Nation）を中心とする氏族主義を意味していると考えられる。ヘルダーにおけるこれら二つのドイツ語の用法を見ると、「民族主義的な偏狭なナショナリズム」とヘルダーを短絡的に結びつけることには慎重でなければならない。

以上の報告に対する質疑応答は以下のとおりである。まず、セミナーの表題にもある「市民」という言葉について、フロアから、ヘルダーの生きた時代のドイツにおける「市民」の実体とはどのようなものであったのか、という問が示された。これに対して嶋田氏は、「近代市民社会」という観点からみると、ロンドンやパリという大都市を持つイギリスやフランスに比べると、領邦国家として多数の小規模な領邦の連合体のような観を呈するドイツでは「市民」の実体は不明瞭である、と応答しつつも、ヘルダーは、それまで低く見られていた「Volk」の啓蒙・教育を

○○○ 地球社会統合科学セミナー報告

通じて「市民」の形成を目ざしたのではないか、と主張した。また、討論者からはヘルダーのユダヤ人理解について質問があったが、ヘルダー自身はヘブライ語を習得していたのみならず当時のユダヤ人哲学者モーゼス・メンデルスゾーンとも親交があり、啓蒙主義のキーワードでもある「寛容」の精神を十分に体得していたと思われる、との回答があった。

続いて、「国家と宗教の対立をいかに克服するか―マルクス『ユダヤ人論』を手がかりに」と題して報告した鏑木政彦氏は、冒頭、地球社会統合科学府が掲げる「地球社会的視野」に立った場合の人類の共存という課題にヨーロッパ思想史は何が貢献できるのか、と大きく課題を設定した。そのような問題意識にたって、初期マルクスの『ユダヤ人論(ユダヤ人問題によせて)』の背景とその中心的な主張、そして現代への示唆を読み取ろうとしたのが鏑木報告であった。

問題の背景として重要な点は、現代の自由民主主義の自明の原理となっている個人主義が、まさにユダヤ人問題を生み出すように働いたということ、マルクスの主張において重要な点は、個人主義を市民社会のエゴイズムを正当化する原理とし、それを克服する原理として新たな共同体を発想したということ、現代への示唆として重要な点は、このような共同体の発想が悲劇をもたらした歴史を踏まえつつ、私的領域における諸個人を結びつけるさまざまな超越的媒介(ネイションや宗教等)の作用の両義性に自覚的となることが求められるということ、であった。

質疑応答では、討論者から、マルクスの「宗教一般」という言葉が、当時の宗教学や人類学との関係で何を意味するのかが問われた。これについて報告者は、宗教学や人類学との関係よりも、むしろ政教分離という原則のもと、多様な公的市民が私的領域で信じている諸宗教を等価なものとして取り扱うことによって構成される、いわば自由民主主義という制度のもとにおける宗教概念ではないかと回答した。マルクスは近代的な政治制度のもとにおける宗教のあり方を的確に見抜くとともに、そのようなものとして宗教概念を設定しかつまたその宗教を批判する(「宗教はアヘンである」)ことによって、国家と宗教の関係そのもの(政教分離)を根底から変える必要性を見透していたといえる。これに関連して、それではマルクスの「宗教一般」は「市民宗教」と同じものなのかどうかという疑問も出された。市民宗教について論じたルソーをマルクスが引用していることから明らかなように、マルクスは市民宗教概念を意識している。ブルジョワをシトワイヤンとする市民宗教と、ブルジョワとしての市民の内的宗教である宗教一般とは異なる。しかし、重要なことは、ルソーにおいても市民(ブルジョワ)と公民(シトワイヤン)は分裂しているとマルクスが考えていたことである。ルソーの国家は、マルクスにとっては十全なる共同体ではなかった。マルクスはその意味で「市民宗教」以上のものを求めたといえる。

最後の、「「人道の世紀」における人間と民族の尊厳―ソヴィエト・ユダヤ人の自分史を読む」と題した松井報告は、トロツキー派に与したために3度の逮捕と収容所送りを体験したM・D・バイタリスキーという人物が残した自伝的回想録を素材にして、ソヴィエト・ユダヤ人にとり人間の尊厳と民族の尊厳が深く結びつく様を考察するものであった。ユダヤ人差別に直面してユダヤ人アイデンティティを固めたバイタリスキーは、民族的属性をはぎ取られた無色透明なものではない人間=市民の在り方に普遍性を見いだしながらも、ドレフュス事件とスターリンの大テロルに対するそれぞれの国の市民や知識人の態度を比較しながら、「権威主義社会」ソ連における人間の尊厳の侵害に鋭い批判を向けた。

本報告に対しては、ソヴィエト・ユダヤ人であるバイタリスキーにとってのユダヤ教やイスラエルの位置づけに関わる質問に加え、彼のいう人間の尊厳の射程がユダヤ人を越えて他の民族にも広がりを持ち得ていたのかどうかといった問いや、リベラルな国家であっても、あるいは、そうであるが故に、通常、統合的に実現することが難しい人間(個人)と民族の尊厳双方の制度的両立にかかわって、諸民族の平等をも理念にかかげた革命国家ソ連の現実はどうであったのか、といった鋭い質問が相次いだ。それに対して報告者は、バイタリスキーが20世紀を「人道の世紀」として把握する歴史意識を示していたことを前提に回答を試み、バイタリスキーが「根をもったコスモポリタン」(討論者の用語を借用)であったことを強調しつつ、ソ連の民族政策の実態にも言及した。

全体をふり返ると、いずれの報告に対しても、その内容を十分にふまえた質問が提起され、質疑応答も密度の濃いものとなった。本セミナーの主題を考案し、報告者を選定した古谷嘉章学府長が自ら「渋い」企画と評したように、歴史と思想を取り扱う地味なセミナーであったにもかかわらず、他学府の院生や各分野にまたがる教員を含む20人を超える出席者が得られたことは、誠に喜ばしいことであった。テキストの読み解きに基づく歴史的思想史的研究の営為がさらなるインプリケーションをいかに持ちうるのか、というフロアからの問題提起の重みを感じながら、セミナーをふり返った次第である。

海外での学会発表を通じて

岩　橋　由　季
（比較社会文化学府・日本社会文化専攻）

2014年4月にオーストラリアのアデレードに位置するフリンダーズ大学にて開催されたNational Archaeology Student Conference (NASC)で、口頭発表の機会をいただいた。きっかけは学会の二ヶ月前に来日されたフリンダーズ大学のClaire Smith先生のお誘いであった。Smith先生は、今年度Japanese Massive Open Online Courses (JMOOC)の一貫としてOpen Learningを通じて配信されたグローバル社会考古学のオンライン講義に関する打合せのために、九州大学に滞在された。この講義の講師をSmith先生と比較社会文化研究院の溝口孝司先生が務められたこと、またSmith先生は溝口先生が現在務められている世界考古学会議の会長職の前任者であったこともあり、比較社会文化学府の考古学・人類学を専攻する学生も交えてのワークショップも開催された。その折、Smith先生から二か月後にご自身の大学で学会が開催されること、オーストラリア国内の学生のみでなく他国の学生が複数発表者として参加する予定であること、ついてはそこで発表してみないかとのことを告げられた。初めは、社交辞令のようなものだろうと思い「いいですね、可能であれば参加してみたいです」などと言っていたのだが、その翌日お会いしたときにゼミ室でパソコンを立ち上げた先生は「いまから学会参加申請の手続きをしましょう」とおっしゃったのである。

かくして心の準備もろくにできないまま申込みは終わり、私の発表は受理され、慌ただしく発表要旨を送付し、渡航チケットの手配をし、発表の準備に追われたのであった。学会には私と同じく博士課程に在籍する後輩の二人で参加した。幸い比文の学会報告支援事業から一定額の援助を受けられたことと、滞在中はSmith先生のご自宅に泊めていただけるとのことで、金銭面について深刻な問題はなかった。しかし渡航したところ、事情により予定が変わっていて宿泊先を別に手配してくださっていた。そして、そこには学会に参加する他国の学生も滞在するので、我々を含めて5人でのシェアハウスになるとのことであった。私は決して英語が堪能な方ではない。それが、初めてのオーストラリア訪問、初めての外国で開催される学会での発表に加えて、初めてのシェアハウス、しかも初めて出会う他国の学生と一緒の、である。それを知ったときの衝撃を想像していただきたい。しかし、滞在先のアパートメントに到着し、そわそわしながら他の学生の到着を待っていた我々の前に現れたのは、気さくなオランダ人の女子学生1名と陽気なルーマニアンガイ2名であり、結果的に滞在は非常に楽しいものとなった。

▲宿泊先のリビングにて

前置きが長くなったが、参加した学会について述べたいと思う。NASCは毎年オーストラリアの各大学で行われている学会で、基本的には学生を中心に運営されている。発表のテーマは特に定められてはおらず、発表者の学年などにも制限はない。そのため、発表者は学部生から博士課程の学生まで、その研究内容、プレゼンのスタイルも多岐にわたるものだった。印象的だったのは、それぞれの研究フィールドが多様であったことである。学会の参加者は他国からの参加者5名を除いては基本的にオーストラリア各地の大学生だったのだが、研究対象となる地域はオーストラリア国内に留まらず、ニュージーランド、イギリス、イタリア、ヨルダン、エジプト、ケニア、チリなど世界各国に広がっていた。中には、実際に海外での発掘調査に参加している学生もいた。日本の学会での発表は多くが日本国内を対象としたものであることを考えると、彼らの意識は広く海外にも広がっているという印象を受けた。

学会全体については、そのスタイルの違いに驚くことが多かった。ひとつは、学会本体の前後にいくつものワークショップやトークが企画されており、会期自体が長いことである。我々以外に他国から参加した学生は、1週間以上オーストラリアに

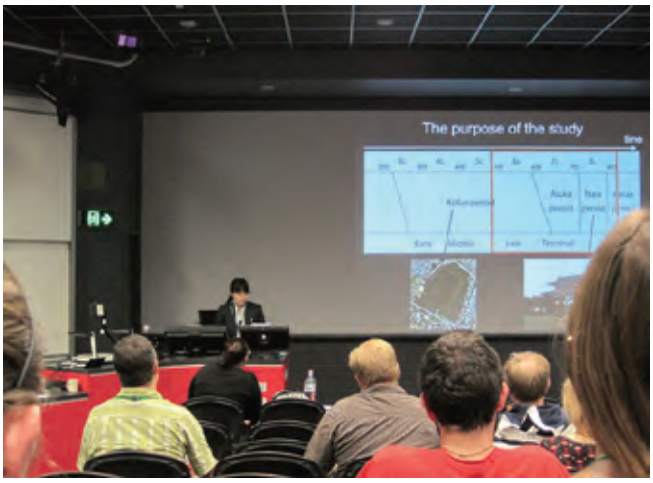
○○○ 海外レポート

滞在していた。また、学会全体を通して学生が積極的に発言する場面が多かったこと、食事時や懇親会の場で学生同士が活発に交流していることも印象的であった。言語の壁は果てしなく高かったが、せっかく見知らぬ土地に乗り込んできたのだからと拙い英語で他の学生に話しかけ、研究のことや学生生活のことなど情報交換ができたのは得難い経験だったと思う。

▲昼食時のキャンパス内

私自身の研究内容は、6世紀から8世紀頃を中心に造られた墳墓の分析を通じて、日本列島における古代国家形成期の地域間・階層間の集団の関係を明らかにするというものである。そのため、国内の学会で発表をするときには共有されているはずの概念や前提、歴史的背景について適切な説明を加えなければ、聞き手に発表内容を理解してもらうことはできない。また、自身の研究をどのようにプレゼンをすれば、他国の研究者に興味をもって聞いてもらえるかということについても頭を悩ませた。試行錯誤の上、研究対象とする時代の歴史的背景、そこで墳墓の研究を通じてどのようなことが明らかにされてきたのか、私自身はどのようなアプローチで上記のような内容を明らかにしてきたのか、といった構成で発表を組み立てた。

発表の後、質疑応答の時間に思わぬ方向からの質問があった。私が重点的に検討していたのは墳墓の構造についてであったのだが、これと関連して古墳の彩色壁画について少し話をしたところそれについて尋ねられたのである。想定外のことにうまく返答ができず、休み時間に質問をしてくれた方のところに追加で説明をしにいく羽目になったのだが、そのような角度から検討を深められる可能性について改めて気付くなど得られるものがあった。後で気付いたのだが、他の学生の発表もデザインやモチーフに関するものが多い傾向にあったことが、そのような質問が出た原因と考えられた。事実、私の後に古墳時代の銅鏡の鏡背文様のデザイン決定について発表した後輩は質問攻めにあっていた。



▲発表時の様子

一方、列島規模での情報の共有があったという現象やそれを可能にしたネットワークの実態といった発表の核心部分に関する質問やコメントが得られなかったことは残念であった。聴衆の興味関心にもよるとは思ったが、自分のプレゼンテーションにもまだまだ改良すべき点があったと反省した。

日本の考古学界は現在、2016年に京都で開催予定の世界考古学会議第8回総会（WAC8）に向けて準備を進めている。今回の学会参加は、世界の考古学者が一堂に会するその場に意識を向ける良い機会であった。日頃、先生方からご指導いただいている、「自分の研究を世界的に位置づけるとどうなるのか?」「研究の背景を共有していない人に対して自分の研究成果をどのように説明するのか?」といった問題を切実に考えることができたからである。日本の考古学研究に関することは、あまり世界に発信されていないといわれるが、そのような問題について、あるいは学問のグローバル化とは何なのかということについて考える契機になるのではないだろうか。私自身の研究については、国家形成期の地域あるいは集団の統合が日本列島ではいかに行われたのかという問題意識の下研究を進め、その成果について発信することを目標にしたいと感じている。

国家の枠を超える日本語文学研究
—「近現代文学と東アジア」研究会第二回合同研究会の報告—

大　場　健　司
（地球社会統合科学専攻）
（地球社会統合科学府博士後期課程）

2014年9月21日、上海の華東師範大学で「近現代文学と東アジア」研究会第二回合同研究会が開催され、筆者も発表を行った。第一回合同研究会は2013年9月14日、韓国・釜慶大学で開催されており、二回の研究会で釜慶大学人文社会大学と韓国・東義大学人文大学、華東師範大学外国語学院という、本学府と部局間交流協定を結んだ大学との学術交流が行われた。

今回の研究会では、本学府や開催校、協定校の教員、大学院生のみならず、以前、九州大学に留学し、中国の大学に就職した教員も多数、参加しており、さながら同窓会のようであった。

（研究会の様子）

現在、文学研究は一国家の枠組みから離れたものになってている。アメリカ文学研究では、ガヤトリ・スピヴァク（Gayatri Chakravorty　Spivak）の『ある学問の死—惑星思考の比較文学へ』（*Death Of A Discipline,* 2005）における「プラネタリー」（Planetary）から、ポール・ジャイルズ（Paul Giles）の「環大西洋」（Transatlantic）に至るまで、国家の枠を越える比較文学が最先端となっている。それは日本においても同じことで、植民地文学研究やポストコロニアル研究が盛んになってきている。近年では、竹内勝徳、高橋勤編『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネサンス文学』（彩流社、2013年4月）や日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ』（新曜社、2014年2月）、鈴木暁世『越境する想像力—日本近代文学とアイルランド』（大阪大学出版会、2014年2月）が国家の枠を越える研究の好例となっている。そこで特に注目したいのが、「東アジアと同時代日本文学フォーラム」（http://eastasiamodern-lit.web.fc2.com/jp/indexjp.htm）とその雑誌『跨境—日本語文学研究』（笠間書院、2014年9月—）である。このフォーラムでは、日本のみならず韓国や台湾、中国の研究者が集まり、「東アジア」という観点から日本語文学を再構築することが目指され、創立大会が2013年10月17日から19日まで、韓国・高麗大学日本研究センターで開催されている。そのような流れの中で、文学史や大学教育の再構築を目的として開催されたのが、今回の「近現代文学と東アジア」研究会だったのである。

（華東師範大学内の毛沢東像の前での集合写真：左から筆者、林相珉先生、波潟剛先生、松本常彦先生、尹一先生）

研究会ではまず、「若手ワークショップ」として、大学院生や若手の教員が研究発表を行い、その後、「文学史の再検討」をテーマにした個人発表が行われた。

筆者の発表「進化論・異端・アナキズム—安部公房「異端のパスポート」とスタンリー・キューブリック『2001年宇宙の旅』—」については、先生方から様々なコメントを頂くことができ、非常に有意義であった。九州大学大学院の栗﨑愛子氏の「大正15年と中国—『改造　現代支那号』が示す方向」は、雑誌『改造』（改造社、1919年4月—1955年2月）に注目することで、横光利一（1898—1947年）と日本、中国の関係を論じるメ

○○○ 海外レポート

ディア論的なものであった。華東師範大学の金晶先生の「民国期における谷崎潤一郎作品の翻訳紹介状況について」と中国・同済大学の梁艶先生の「中国における加藤武雄の移入について」では、日本文学の中国での翻訳と受容が論じられた。上海理工大学の楊本明先生の「上海と東京:カフェを通して見る女給の世界」は、文学作品におけるカフェの女給の描かれ方に注目した日中比較文化論であった。中国海洋大学の黄英先生の「大城立裕「朝、上海に立ちつくす」」では、沖縄出身の作家、大城立裕(1925年―)に注目することで、沖縄と中国、アイデンティティの問題が扱われていた。

また、「大学教育における文学」をテーマにした個人発表では、釜慶大学の尹一先生が韓国の大学において日本文学関連の学科が閉科されている現状について発表された。

(上海の都心部の様子:左から松本常彦先生、林相珉先生、筆者)

(上海の魯迅記念館の入り口にある魯迅像)

研究会終了後には、楊本明先生に上海の街並みを案内して頂き、夜景も見ることができた。九州大学に留学されていたころから、楊先生には親切にして頂いており、大変感謝している。また、その翌日には、楊先生と華東師範大学の潘世聖先生に、魯迅記念館などを案内して頂いた。上海の先生方や大学院生にはとてもお世話になり、感謝を申し上げたい。

また、今回の研究会については、華東師範大学外国語学院のホームページに内容紹介がある(「日语系举办中日韩学术研讨交流圆桌会议:“近现代文学与东亚”」(http://www.fl.ecnu.edu.cn/S/147/t/268/bf/43/info114499.htm))。

最後に、研究会の発表者名と題目をすべて記しておく。

●「近現代文学と東アジア」研究会第二回合同研究会
日時:2014年9月21日(日) 9:00~17:00
場所:上海・華東師範大学
主催:華東師範大学外国語学院、
　　九州大学大学院地球社会統合科学府
共催:釜慶大学校人文社会科学大学、
　　東義大学校人文大学
後援:華東師範大学

【若手ワークショップ】
司会:林相珉(東義大学)、潘世聖(華東師範大学)
○王雪(華東師範大学大学院)「村松梢風「上海事変を語る」について」
○大場健司(九州大学大学院)「進化論・異端・アナキズム―安部公房「異端のパスポート」とスタンリー・キューブリック『2001年宇宙の旅』―」
○栗﨑愛子(九州大学大学院)「大正15年と中国―『改造　現代支那号』が示す方向」
○金晶(華東師範大学)「民国期における谷崎潤一郎作品の翻訳紹介状況について」

【個人発表:テーマ「文学史の再検討」】
司会:松本常彦(九州大学)、波潟剛(九州大学)
○楊本明(上海理工大学)「上海と東京:カフェを通して見る女給の世界」
○梁艶(同済大学)「中国における加藤武雄の移入について」
○黄英(中国海洋大学)「大城立裕「朝、上海に立ちつくす」」

【個人発表:テーマ「大学教育における文学」】
○尹一(釜慶大学)「韓国教育部における学部教育の特性化政策と日本文学教育」

Our Faculty Members Actively Participated in the XVIII ISA World Congress of Sociology

Shuanglong Li

(PhD candidate in sociology, Graduate School of Social and Cultural Studies)

In 2014, Japan, for the first time in its history, hosted the XVIII ISA World Congress of Sociology, which takes place every four years, in Yokohama from July 13 to 19. The theme of this congress was "Facing an Unequal World, Challenges for Global Sociology". This congress brought together around 6,000 participants from all over the world to discuss and share their most recent academic findings. This short report presents the contributions made by the members of Graduate School of Social and Cultural Studies at Kyushu University.

The Role of Our Faculty Member: Prof. Misumi

Dr. Kazuo Misumi, Professor of Sociology at our faculty, acted as a core member of the Local Organizing Committee. He also chaired the session on Simulation Studies in Rational Choice Theory. This session brought together scholars who were interested in social institutions and embeddedness problems so as to explore a unique model of embedded institutions where social structures are congruent with rationality.

Student Activities: Making Presentations, Organizing Forums, and Doing Voluntary Work

As the organizer of the International Junior Sociologists Forum, I participated in this one-day event on July 13th in Yokohama, Japan. It was the first time for me to organize an International Mini-Conference, I invited ten PhD candidates from Germany, USA, Poland, The Netherlands, Finland, and Australia to present their recent findings on their PhD projects. Most of them were selected to take part in the International Laboratory for Ph.D. Students in Sociology in Taiwan, 2012 and in Sydney, 2013. Participants

were encouraged to make constructive and substantive comments on their peers' work, both methodologically and theoretically. I presented my new paper on "Pathway to Material and Subjective Wellbeing: The Mediating Role of Social Capital". This research investigates whether and how social capital mediates the relation between initial achieved and ascribed qualities, and wellbeing (material and subjective). Using cross-sectional data from 3,001 respondents from the Chinese General Social Survey 2008, I contribute to this research lines in at least three ways: I investigated the two correlated outcomes, subjective well-being (the level of happiness) and material wellbeing (income level), instead of only focusing on either SWB or MWB. Second, I used multiple measures of social networks (network size and tie strength), and explored its mediating role on the effect of background variables on individual wellbeing. Results showed that social capital partially mediated the relation between initial ascribed qualities and achieved status. I believe it was very informative and well organized as most of the presenters wrote thank-you emails to me when our forum was closed and/or upon their return to their home country. I very much appreciated their encouragement and for coming to the gathering of former ISA PhD Lab participants. We were honoured to have several leading scholars participate as discussants, such as Prof. Robert van Krieken, Vice-President of the ISA, also Chair of Department of Sociology at University of Sydney;

Catriona Elder, Prof. Professor of Sociology at University of Sydney, who was also involved in the ISA Sydney lab in 2013, has been a Visiting Professor at the University of Tokyo this year; Prof. Vineeta Sinha , Associate Professor at the Department of Sociology, National University of Singapore (NUS) and Head of Department at the South Asian Studies Programme, NUS. I personally also want to thank Prof. Yoshimichi Sato (Tohoku University), Prof. Kazuo Misumi (Kyushu University), Prof. Koichi Hasegawa (Tohoku University, President of the Local Organising Committee) for their outstanding support and assistance in making our forum such a resounding success. I would also like to extend a special thanks to my colleague David Macro from Utrecht University for his generous help and for chairing the morning session and pre-conference preparation.

On July 14, I gave a presentation on "Intergenerational Class Mobility in a Colonial Society: A Case Study of Colonial Taiwan, 1906-1945" at the session on Comparison of Social Stratification and Mobility in East Asia hosted by the Research Committee on Social Stratification and Mobility (RC28) of the International Sociological Association (ISA). This paper was co-authored with Ineke Maas (Utrecht University), Marco van Leeuwen (Utrecht University), Thung-hong Lin (Academia Sinica), and Xingchen C.C. Lin (TamKang Univeristy). Previous empirical studies about class structure and social mobility have centred on the early-industrialized nations and a few ex-socialist countries. However, little is known about colonial societies. Drawing data from a newly constructed database, the Colonial Taiwan Household Register Database, this study aims at bridge this gap. We recoded occupational titles into the well-known EGP class schema. Multinomial logistic regression model was employed to estimate the odds ratios of class mobility. First, the later the generation is, the more proletarianized they are. Second, Taiwanese employers and self-employment decreased dramatically. Third, the decline of the labour force in agricultural sector halted after the 1920s. Fourth, it was difficult for the labour force employed in the agricultural sector to flow to the industrial sector. Our research contributes to the understanding of the pattern of class mobility in colonial Taiwan and to research on social mobility in a historical perspective. Many participants highly praised our contribution to studies on historical social mobility patterns in colonial societies.

In addition to session organizers and participants like myself, some graduate students of our faculty served as volunteers during this 9-day international conference, they are Rui Li, Xiangshu Huang, and Tianqi Zhang. Since most of us are multilingual, we could accommodate the needs of scholars from Japan, China, as well as English-speaking countries. We helped many people out in the registration desk, and received many compliments for our excellent dedicated contributions from many conference participants.

Shuanglong Li with Michael Burawoy, the Former President of ISA

Rui Li with Michael Burawoy, the Former President of ISA

Author's Biography

Shuanglong Li, a doctoral candidate in sociology at Kyushu University. Between September 2013 and June 2014, He studied as a visiting fellow at the Department of Sociology, Utrecht University on two scholarships provided by European Institute in Japan and China Scholarship Council, for which he is eternally grateful. His research focuses on historical sociology, social mobility, social networks, and quantitative methods. He has collaborated with some leading scholars in these areas. He started his career as a student of social stratification and social networks.

新しい出発 ○○○

周囲の背中に希望を見出して

草野 真樹
（九州産業大学商学部商学科）

2014年4月、自分自身の人生において三度目の大きな転換を迎えた。一度目は、1993年春、大学進学のため故郷の島を離れ、福岡へ移り住んだ時である。二度目は、2003年春、社会で働き始めた時である。そして、三度目は、九州産業大学商学部商学科に「日本商業史」担当の講師として着任した冒頭の2014年春である。

比較社会文化学府のOBとして原稿の執筆を引き受けたものの、とりたてて取得のない私のことを今さら述べたところで参考とすべきものがあるのだろうかと不安を覚える。

しかし、やや唐突ではあるが、不安や悩みの先にはきっと希望がある。最近、そう思えるようになってきた。おそらく、全国の大半の大学院生が大きな不安や悩みのなかで過ごしているだろう。「論文は書けるだろうか」、「研究は評価されるだろうか」、「経済的に生活はできるだろうか」、そして「結婚はできるだろうか」、「就職はできるだろうか」などと。

上記の不安はすべて私自身のものであるが、多かれ少なかれ、現在、大学院に在籍する院生、これから大学院を目指そうとする学生もきっと同様の不安を覚えるだろう。私が不安や悩みの先に希望があると思えるようになったのは、時間はずいぶん要したけれども、念願であった大学教員として着任できたことが一つの理由ではある。しかし、決してそれだけが理由ではない。私自身、失敗は数知れず、時には大切な信頼を裏切り傷つけ、その結果、本来的に明るい性格が悲観的な性格へと大きく傾いたこともある。

しかし、そのような自分でも恩師、先輩、後輩、友人、知人、職場の上司の指導や協力、そして家族のかけがえのないサポートが途絶えることはなかった。恥ずかしながら、年齢的には人生の折り返し地点に達した今、人と人との繋がりの大切さや有難さを改めて深く実感するようになったことが、不安や悩みの先にきっと希望があると思えるようになった最大の理由である。

だとするならば、その歩みを正直に記すことにも意義を見出せるかも知れない。以下、現役および将来の大学院生に対する私なりのエールと思っていただければ幸いである。

大学進学後、講義だけは欠かさず出席していたこともあり、単位は順調に取得し、卒業要件そのものには何ら支障はなかった。問題は就職であった。ただ、肝心要の就職について、私は自分がいったいどのような仕事に就きたいのか真剣に考えなかった。おそらく、働くこと、自分自身と向き合うことから逃避したのだと思う。当時、やや関心を持っていた出版社を何社か受験したが、当然ながら駄目だった。何をしたいのか分からないまま、気がつくとゼミナールの先生の研究室をたびたび訪ねるようになっていた。その後、ゼミの先生に相談するなかで、もう2年間勉強しながら今後のことを考えてみようと思うようになり、大学院への進学を志した。したがって、私は大学院時代の友人とは違い、必ずしも研究職に就きたいという明確な目標をもって進学したわけではなかった。そのため、進学後も論文の研究テーマは、いわば「あっち行き、こっち行き」といったことを繰り返し、しばしば、恩師から「君は腰が据わらないねえ」と言われた。

友人が堂々と「研究に没頭している」などと言うと、自分とはかけ離れた世界の人だと妙に感心する一方、そのようには言えない自分を恥じた。このままでは駄目だと思いつつも、根っからの無芸無趣味である私はストレス発散の術を持たず、酒量が増えるばかりであった（これは今も変わらないが…）。

しかし、時間はあっという間に過ぎる。論文らしい論文も書けないまま、ついには博士後期課程まで進んだが、経済的な事情もあり働き始めることになった。勤務先は西日本文化協会という、従業員10名足らずの小さな財団法人であった。この財団には本来の業務に加え福岡県地域史研究所という内部組織が置かれ、福岡県からの委託事業であった『福岡県史』の編纂と歴史資料の調査・整理・保存などを主たる業務としていた。私は研究所の嘱託事務局員（助手）として採用してもらい、原稿の校正、資料調査・整理、目録の作成、事務などを担当した。

研究所には私を含め常勤2名の事務局員とは別に、委託事業の円滑な遂行のために15名の研究所員が在籍していた。ただし、所員とはいっても正規雇用でも常勤でもなく、本職は主に県内外の大学に勤める先生方であり、それぞれの先生方が時間の許す時に研究所へ足を運び、仕事をこなすという立場であった。私はその先生方に古文書の扱い方や読み方、資料調査・整理の方法、論文の書き方などを改めて一から教

○○○ 新しい出発

わった。

怠け者の私が、いわば、この集団指導体制のなかに身を置けたことは、とても幸せなことであった。仕事を終えると、「第二会議室へ移動!」と称して、皆で行きつけの酒場へ繰り出し、呑んだくれて帰るのが常であった。しかし、私にとって「第二会議室」は単なる呑みの場ではなかった。普段は無口な先生が饒舌に話し始めたり、あるいは冷静沈着な先生が情熱的に話し始める。お喋り好きな先生は話が止まらない。議論は盛り上がり、時には喧嘩のように激しい言い合いとなることも少なくなかった。しかし、私はいつしか侃侃諤諤と意見をたたかわす先生たちを憧れの眼差しで見るようになり、そして自分も研究者となり、その議論の場に加わりたいと強く意識するようになった。研究所の仕事は委託事業であったため、委託が切れると自分の職もなくなることになっていた。「来年は無職かもしれない」という大きな不安を抱えながらも、次第に「いけるところまでいってみよう」と開き直り、とにかく、先生たちの背中を追いかけようと決心した頃には、もう30代半ばを迎えていたように思う。

もう一つ、私に大きな影響を及ぼしたのは教員をしていた父の存在であった。経済的な事情から自分の希望する道を断念し、島に残り小学校の教員となった父であったから、私が大学院に進学したいと相談した時、一言も反対はしなかった。むしろ、応援してくれた。気がつくと、父と同じように自分も教壇に立ってみたいと思うようになっていた。

そのように目標と決心を固め、研究所の先生たちの指導を仰ぎながら、経営史学会全国大会において研究報告をしたことは一つの転機となった。2008年10月、一度目の報告は、発表するだけで精一杯であり、質疑応答は惨憺たる出来であった。ただ、お一人のとある先生が熱心に質問して下さり、初対面であったにも関わらず、報告後にもたくさんのアドバイスと激励をくださった。翌年10月、もう一度チャレンジしてみようと思い、全国大会で報告した。その時、司会を担当してくださった先生が、前年の報告時に激励してくださった先生という幸運に恵まれ、その先生の巧みなフォローを受けつつ、質疑応答を含め、自分としては今までで一番良い報告ができた。この時、自分の研究に初めて手応えを得ることができた。また、地方部会のように、いわば顔の見える関係の場だけで報告を積み重ねるのではなく、普段とは違う関係の場にチャレンジすることの大切さを学んだ。その時の口頭報告は論文としてまとめ、全国学会誌への掲載までこぎつけることができた。そして、何とか念願であった教員の職に就いた時には、すでに40歳になっていた。

さて、2014年4月から教壇に立ち、講義とゼミナールを担当するようになった。しかし、これまた失敗の連続である。専門用語を並び立て、いかにも難しそうに話すよりも、学生が理解できるよう言葉を噛み砕いて説明することの方が実は相当に難しい。研究分野に限らず、どの分野に進むにしても、誰に対しても分かりやすく説明ができるよう訓練を積んでおく「当たり前」の大切さを改めて痛感させられる。

ゼミナールの運営も難しい。学生には「何事にももっと主体性を持って参加しなさい」と言いつつ、本当は私の経験不足、リーダーシップの欠如により彼らをうまくリードできていない。心の中で苦笑いしながら「ごめんな」とつぶやいている。しかし、学生の笑顔に助けられながら過ごした1年であった。学生から「先生ありがとう」と言われると素直に嬉しく、教員になって良かったと実感する。そして、改めて実感することがもう一つある。

タイトルに「周囲の背中に希望を見出して」とつけた。しかし、本当は違う。いつも、周囲が私の背中を押してくれていたのである。今でもはっきりと覚えているが、大学院に進学した時に恩師から「大学院生はある意味病気になりますよ、君は大丈夫ですか?」と声をかけられた。その時は恩師の真意を理解できなかったが、おそらく、大学院時代の厳しさを最初に伝えておきたかったのであろう。しかし、恩師をはじめ周囲からの数多くの支えを得て、今、元気に過ごせることを本当に感謝している。

けれども、感謝ばかりもしていられない。たとえ非力ではあっても教員として責任を負う立場になった。研究分野に限らず、どの分野に進むにしても、学生、大学院生を取り巻く就職戦線は厳しい環境にある。多くの学生、大学院生がたくさんの不安を覚えるだろう。だからこそ、今度は私が彼らの背中を少しでも押してやらねばと思う。不安や悩みの先に希望があるのだから。

就職ガイダンスに参加するゼミナール生(3年生)

新しい出発 ○ ○ ○

片道2万キロ

米　村　和　紘
（独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構　資源探査部）

いま、南米チリに向かう機内にいます。夜、米国を出発し朝靄の立ち込める首都サンティアゴに向かうこの飛行機の窓からは、朝日を浴びるアンデス山脈の稜線と南米西岸のペルー寒流に冷やされた空気の作る雲海の美しいコントラストが見えています。今回はサンティアゴに到着後すぐ飛行機を乗り継いでアタカマ砂漠へ向かい、明日から新しいプロジェクト発掘のための現地調査を行う予定です。

アンデス山脈と雲海

小山内教授をはじめ、地球変動講座・比文の先生方、研究員・院生の皆様、ご無沙汰しております。福岡から東京に移り、資源開発に携わり始め2年近くが経ちました。今の職場では、月に1度、南米チリやペルー、アルゼンチンまで片道2万キロを通勤しています。片道25時間、時差も12～14時間あり、凡庸な表現ですが地球の裏側までやってきたと毎回思います。地球の裏側でも、ザック、登山靴（時に地下足袋）、ハンマー、ルーペの正装で、日に何百キロも移動しながら、海抜1,000mの沿岸の砂漠から5,000mを超えるアンデス山脈の中まで歩いています。

資源開発の舞台は、国境に関わらず地球の変動域にあたります。そのうち現在私の探査のメインターゲットとなっている銅鉱床は、アンデス山脈に代表されるような海洋プレートの新旧沈み込み帯に多く分布しており、形成される時代を億年スケールで遡れば、実に様々な場所（ユーラシア大陸のど真ん中のモンゴルから日本列島まで）にそのポテンシャルがあります。鉱床それぞれに複雑な形成過程がありますが、大局的には同様の地質学的背景で金属が濃集しています。このためプロジェクトの発掘には、まずどの地質背景の地域を狙うかを定め、広域的な地質をよく理解したうえで、現地で丁寧に観察することが必要です。このような過程は、比文での東南アジアの大陸衝突の研究でずっと取り組んでいたことで、毎朝研究室で指導いただいていたことを頭に浮かべつつ、さまざまなデータの検討を重ねています。

人の関与する要素がとても強いことも、資源開発の特徴です。今のところ採掘される鉱床の多くは人間が生身で活動できる高度・深度のものですし、鉱床そのものの良し悪しに加え地元住民が鉱山を歓迎しているかどうかという点にも開発・探査が制約されています。地元コミュニティとの交渉が難航し探査がストップしてしまう事例はいくつもあります。また、資源国にとって鉱山開発は経済成長の重要なエンジンですので、持続的に開発を続けていくためにも、社会インフラを整えたり、中には法整備のサポートを行ったりして、資源開発で得られた利益を資源国へ還元する企業も出てきているようです。

標高4,800m アンデス山脈での現地調査

地球の裏側で資源開発に関わり始め、いろいろな人・地域・国の関わるところでは、一つの常識だけでは太刀打ちできない複雑な問題があると肌で感じます。それはさておき、ジオロジストの本懐は新規発見ですので、明日からの調査でも丁寧に露頭・地質状況を観察し、議論を重ねてきます。

それでは、いってきます!

○○○ 社会人院生コーナー

大学院生活の半分を終えて

藤　井　　整
（日本社会文化専攻・博士課程）

日本社会文化専攻博士課程に昨年度の秋からお世話になっています。普段は、京都府教育委員会の文化財保護課で働いており、総合演習や論文指導を受けるため、福岡まで通っています。私は、25年ほど前、京都の龍谷大学で考古学を学び、修士課程へ進んだ後、京都府教育委員会に就職しました。

就職してからは、発掘調査技師として、兵庫県の震災復興調査や、京都府内の公共事業などに伴う発掘調査に携わってきました。現在は、京都府内の史跡について、その指定や整備・修理事業、それに伴う国庫補助に関する事務などを担当しています。

私は、学生の頃、奈良県の唐古・鍵遺跡の発掘調査に参加したことをきっかけに弥生時代の研究に興味を持ちました。就職してからは、特に、近畿地方の墓制研究を続けており、少しずつ近畿地方以外の地域でのシンポジウムにも発表者として呼んでいただけるようになりました。

しかし、40歳に近づいた頃から、周囲のみなさんが発表や研究内容に対して注意をして下さらなくなりました。はじめは、一定の評価を受けているのかも知れないと思っていましたが、どうも叱ってもらえる年齢ではなくなってきたらしいということに気がつきました。研究を進めていく上で感じる、自説への違和感。気になるけれど、自力で修正することができず、徐々に不安が増してきました。同じ頃に父が他界し、自分の年齢は、とっくに人生折り返しているということにも、遅ればせながら気がつきました。

どこかで指導を受けたい。私の研究に出口があるとするなら、田中良之先生や溝口孝司先生の書かれている論文の方向にあるのではないか。そういう思いは、日に日に強くなっていきました。しかし、仕事のことや家族のことを考えると決断することができませんでした。まして、縁もゆかりもない九州大学へ進学したいなどということは、私の立場からすれば、現役の学生さんにもOBの皆さんにも失礼だ、そう思うと、なかなか言い出せませんでした。

正直なことを言えば、今さら若い人の中に飛び込むということの恥ずかしさ、そこで通用しなかった時の家族や職場への申し訳のなさを思うと足がすくんだというのが本当だったのかもしれません。そんな頃、福岡県で開かれたSEAA（東アジア考古学会）に参加しました。そこで、比較社会文化学府の院生さんたちが発表しているのを聞いて、その優秀さに驚きました。社会人として若い人の中に飛び込むのであれば、自分よりも優秀な人の中で学びたい、その思いはますます強くなりました。

私が博士号に挑戦したいと考えていることは、妻も知っていました。妻は、研究のことも、家庭のことも総合して、ちゃんと考えた上で、それでも九州大学に行きたいと言うのなら、自由にすれば良いと言ってくれました。反対されるよりも重い言葉だと思いましたが、それでも行きたいという思いが勝りました。

職場は、東日本大震災の支援のため、京都府からも発掘支援のため職員が派遣されることが決まっていました。私より若い職員たちが被災地で発掘調査をする。阪神淡路大震災の時の経験が思い出されました。津波と原発の状況を考えれば、私が兵庫で経験したよりも、厳しいものになるだろうということは十分に予想できました。同僚に対し、あまりに非常識ではないか。悩みましたが、職場の同僚は暖かく送り出してくれました。

所属長の許可を貰うことができ、家族の支援も得て、ようやく日本社会文化専攻でお世話になることが叶いました。しかし、博士課程1年前期は、正直なところ悪夢のようでした。これまで考えていたことが上手くいっていないということを、嫌と言うほど痛感しました。研究を立て直すどころか自分が立ち直れない、そんな状況に陥りました。九州大学で博士号とは、なんとも思い上がった挑戦だったと情けなくなりました。私がもっと若ければ、そのまま折れていたかもしれません。しかし、年をとって随分とずうずうしくなっていたようで、恥はかいてナンボ、居直って再び取りかかることができました。

今取り組んでいる研究が上手くいっているのか、いないのか、正直なところ今の私には確信がありません。ただ、今までになく勉強することが楽しいと思えるようになり、思い切って飛び込んで良かったと思っています。社会人学生生活も半分が過ぎようとしています。全て終わった時、家族や同僚に顔向けできない…というような事にならないよう、気を引き締めて頑張っていこうと思います。

博士論文を書き終えて

石　田　智　子
（比較社会文化研究院・日本学術振興会特別研究員）

私が比較社会文化学府の修士課程に入学したのは2004年です。その後、博士後期課程に進学し、学術研究員、日本学術振興会特別研究員を経て、2014年6月30日付で博士学位を授与されるまでに10年かかりました。

私は、学部生の頃から一貫して、北部九州地域の弥生時代を対象に、土器の形態・文様など諸属性の時空間動態の把握を通して、社会変容プロセスを実証的に解明する考古学研究に取り組んできました。収蔵庫にこもって、土器を地道に観察し続ける時間は、とても楽しかったです。けれども、研究のオリジナリティーが見出せず、「今時こんな古臭い普通のことをしても役に立たないよ」と嘲笑されることも多く、ずっと行き詰まりを感じていました。博士課程3年になっても状況は変わらず、もう研究はやめよう、才能がないから諦めよう、と内心見切りをつけていました。

転機は、比較社会文化研究院の田中良之先生・小山内康人先生を中心に始められた平成22年度九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト（P&P）「高精度元素・同位体分析システムを用いた原始古代人口移動・物流ネットワークの研究」で、先史時代における土器を中心とする物流ネットワーク解明の担当を任されたことです。分析に着手するにあたり、小山内先生から、「全面的にサポートするが、研究の舵は君が切りなさい」と言われました。まさか自分がリードする立場になるとは考えてもおらず、先行き不安でした。

私が取り組みを開始したのは、地球科学的分析手法を考古学に適用した胎土分析です。胎土分析とは、土器物質そのものに着目し、土器がつくられた場所や製作技法、原材料の採取地の情報を得ることで、より具体的な土器の動き、さらには人の動きや社会関係にアプローチする方法です。これまでは肉眼観察で土器胎土の特徴を把握してきましたが、主観や経験に基づく判断に過ぎませんでした。地球科学の分析手法を適用することで、土器胎土の元素組成や鉱物組成といった客観的なデータを獲得し、地質環境を考慮して解析することで、より精緻な土器の生産や移動現象を把握することが可能となります。これまでにも自然科学的分析手法を用いた考古学研究は行われてきましたが、自然科学者に分析を委託し、結果を考古学者が教えてもらう分業体制が一般的です。しかしながら、分析事例は増加しても、成果を考古学的諸問題の解決に有効活用できていない現状を考えると、考古学と自然科学の融合研究はまだまだ発展の余地があります。考古学の立場にある自分が地球科学的分析を実践することで、考古学界に新たな展望を示すことができるのではないか、少しでも社会に役立つことができるのではないかと、ようやく光が見えてきました。

文理融合は比文の特徴ですが、「文系」と「理系」の壁は厚いのが実際です。異なる研究分野に足を踏み入れることに、最初は抵抗を感じました。なにしろ「理系」の本格的な分析など見たこともやったことも知識もない、完全なる「文系」人間だったからです。ビーカーの洗い方に始まり、データ解析方法に至るまで、丁寧に根気よく教えてくださった地球変動講座の教員・学生の皆様には本当に感謝しています。

そして、実践を重ねることで、だんだん分かってきたことがあります。考古学も地球科学も、フィールドでの情報収集を基礎とし、室内での整理作業や分析の実践、それらの成果を評価するための先行研究の理解やモデルの提示など、研究のステップは共通します。また、いずれも地球に由来する物質を研究対象とする点も同じです。考古学と地球科学の融合研究を実践する上で、ゴールとなる目的意識が共有されれば、そこに至るまでのプロセスも共有できることを認識できました。さらに、考古学と地球科学それぞれの問題意識に応じて、異なるルートで同じゴールを目指すことで、途中で見える景色も異なり、多

考古学と地球科学の合同ゼミ後の野球観戦。
筆者は後列左から二番目。

○○○ 博士論文を書き終えて

角的側面からの見解を踏まえた深みのある結果に行き着くことができます。論理的思考を共通基盤にもつことで、同一ステージで議論することが可能です。また、考古学分野で当然と思っていた概念を分かりやすく説明するために、自分が拠って立つ分析方法や思考体系を客観的に捉える契機にもなりました。

ちなみに、考古学と地球科学のいずれもお酒好きな研究室であることも、私に合いました。共同研究を推進するためには、お互いを理解し、信頼することが必要です。共飲共食儀礼を通じて集団の結束力を高める行為は、先史時代から変わりません。

学際研究では、軸となる専門分野の基礎が重要です。基礎の形成には時間と根気が必要であり、派手な成果もなかなか出ませんが、着実に力はつきます。私の場合も、土器と向き合い続けた経験が、ようやく活きてきました。学生時代は辛かったですが、厳しい指導で基礎知識・技術・思考方法を詰め込まれることは大学院生にとって必要なステップであり、先生方の愛情表現です。決して優秀な学生ではなかった私が、博士号取得まで辿り着けたのは、間違いなく教育の効果です。

博士論文を執筆する際に最も苦労したのは、体系をつくることです。興味関心が散漫で、無計画だった自分を呪いました。しかし、これまでの断片的成果が、一貫した軸に沿って収斂していくプロセスは、「まとめる」意味を知る有益な経験となりました。最初から計画的に執筆を進めるあり方が、本来望ましいでしょう。けれども、その時々で直面する課題に柔軟に対応する形で、研究計画を更新する方法もあります。固定観念にとらわれず、自分にあった研究スタイルを確立し、信じて突き進んでください。

博士論文を完成させるまでは大変でした。私はやや完璧主義なところがあり、一方では博士論文の完成に至る推進力となり、他方では遅筆の原因になりました。期限が迫っているのに執筆が進まず、PCのキーボード上で指が震え、自分の無能に涙する日々。考えがまとまらず、頭を冷やすために、真冬の深夜の伊都キャンパスを彷徨うこともたびたび。けれど、そのたびにアイディアを思いつき、寒空の下でメモを書きつけました。

博士論文の執筆を終えてのアドバイスは、次の3点です。
1）指導教員との十分なコミュニケーションを踏まえたスケジュール調整が重要。予想以上に手続きに時間がかかります。
2）精神管理。息抜きをして、心身の余裕を確保。
3）完璧を求めない。割り切りが肝心。

特に、未完成ではあっても、将来の展望に結びつく成果を得たのなら、きちんと自分自身で価値付けることが大事です。文系学生にとっての博士号の位置付けは、近年大きく変わりました。研究人生の集大成ではなく、研究者としてのライセンスです。文系学生は博士課程を長期間過ごしがちですが、その間の苦楽は、「博士論文」という形で具現化しなければ、誰も評価できません。出しましょう。学問は常に進歩し続けています。現時点の最新成果をまとめ、次世代につなげることが、私たちの役割です。過去と未来をつなぐために、現代社会で歴史を学ぶ意味を、ようやく最近実感しています。

この場を借りて、審査員をお勤めいただいた溝口孝司先生、田中良之先生、小山内康人先生、岩永省三先生、武末純一先生（福岡大学）、日常的に御指導いただいた宮本一夫先生、菅浩伸先生、佐藤廉也先生、瀬口典子先生、辻田淳一郎先生、田尻義了先生、舟橋京子先生、中野伸彦先生、足立達朗先生、石川健先生に御礼申し上げます。特に、研究を挫折しかけた私に、着手した研究を完遂する意義を諭し、継続する場を与えてくださった田中先生。地球科学的基礎が皆無な私を受け入れ、実践の機会と、厳しく楽しく温かい研究環境を与えてくださった小山内先生。お二人のお力添えがなければ、私の研究人生は4年前に終わっていたでしょう。諸先生の学恩に報いるためにも、引き続き精進することを誓います。また、比較社会文化研究院基層構造講座・基層文明講座・地球変動講座、人文科学研究院考古学研究室の学生諸氏には、常日頃より御助言・御協力をいただくだけでなく、多くの楽しい時間を共有することができました。多様なバックグラウンドをもつ刺激的な先生方や先輩・後輩に恵まれて、私は本当に幸せでした。

大学院に入った頃は、あまりにも自分の知らないことが多すぎて、怯んでいました。今は、率先して未知の世界に飛び込みたい気持ちを抱いています。そのような勇気を、比文での学びが授けてくれました。ありがとうございました。

奈良古墳踏査。筆者は右端。

博士論文を書き終えて

福　井　令　恵
（九州大学 研究戦略企画室 学術研究員）

私は2013年3月に博士論文を提出し、6月に博士号を授与されました。博士論文を書き上げてからもう2年近く経ったのだと、あらためて感慨深く思います。指導教員の三隅一人先生、杉山あかし先生、阿尾安泰先生には、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

私の研究テーマは、紛争後社会の二つの対立する住民集団の集合意識と記憶についてです。調査は北アイルランドのベルファスト、なかでも最も紛争の影響が深刻な場所を対象としました。そのため当初、調査を進めるのに苦労しました。通常フィールド調査を行う場合、調査協力者を得ることが不可欠ですが、これが容易なことではありませんでした。

2006年になって地域内で信頼の厚いリーダー的な人物を紹介してもらい、彼との信頼関係を一定程度得ていくと、状況が変化しました。それ以前はなかなかアクセスできなかった人や場所に、彼を通して連れて行ってもらうことができました。それまで数年間文献を読み、街を歩き回り調査を行っていましたが、実際に会って話をしてもらえる人―元闘士、政治家、アーティスト、ジャーナリスト、教師、ソーシャル・ワーカーなど―が増えたこと、かなり率直な話を聞けたことから、研究の質量ともに大きく変化しました。彼と地域の仲間、その家族には本当に感謝しています。聞いた話のなかには、論文に書くことができない事柄も多かったのですが、紛争を経験したコミュニティで暮らすことがどういうものなのか、地域での出来事、家族の話、家庭の様子などを通じて、より具体的に理解することができました。

さらに、その後、2007年夏に訪れた時には、対立関係にあった2つのコミュニティの出身者が共同で壁画を制作するというプロジェクトが持ち上がり、たまたまこの時期に半年ほど調査に出かけていたために、現場で立ち会うことができたことは、とても大きな喜びでした。このプロジェクトは、北アイルランドの壁画の歴史100年のなかでも初めてのことであり、歴史的な瞬間でした。BBCや『ガーディアン』紙、『アイリッシュタイムズ』紙など、イギリス・アイルランド両方の主要メディアに取り上げられ、ヨーロッパ各地からも取材クルーがやってきました。私と同時にアメリカ人の研究者も参与観察を行っていたのですが、彼女の記録した映像を日本で見られるようにするため、北アイルランドの大学のtechnicianにPal版からNTSC方式へダビングをお願いすると、内容をみたスタッフから、握手を求められて、驚いたこともありました。こうした地域の人たちが歓迎の声を表明する姿を見たときには、本当にうれしかったです。地域の課題は大きく社会的・政治的な問題は容易に解決するようなものではありませんが、これからも外部の人間として関わりを続けていきたいと思っています。

博士論文という区切りをつけた今思うことを、少しお話ししようと思います。

私は、立命館アジア太平洋大学、福岡県立大学、近畿大学で非常勤講師として働きながら、博士論文を執筆していました。収入を得ること以上に、教育経験を積むという目的のためでした。ただし、講義を担当するというのは、非常に時間と労力のかかるものです。私の場合、初めて担当した講義がやや特殊（日本人学生と約30ヶ国・地域からなる多様な外国人学生の混在したクラスで、規模は100名～250名。言語は英語）だったこともあり、講義を担当している間は、まったく論文を書きすすめることができませんでした。当時講義を行うことに慣れていなかったこと、また大学入学以前に、様々な地域で教育を受けた、基礎知識がひとりずつ全く異なる学生が対象であったために、準備しなければならないことがとても多かったためでした。

それほど特例的ではないにせよ、はじめて非常勤講師をする場合は、講義の準備等で、想像以上に時間がかかります。収入が少ないなか研究を進めることはとても大変ですし、分野や専門によっては非常勤の口がほとんどない場合も少なくないため、博士論文完成前であっても、収入・教育歴を得るために、話があれば引き受けることは、必ずしも悪いことではありません。しかし当初依頼される話は、遠方にあるとか、担当人数が非常に多いなどの、条件的には厳しいものがどうしても多くなると思います。私の場合は、貴重な経験から得たものがとても大きい一方、これによって博士論文の提出の時期はずいぶん遅くなりました（もちろん、博士論文執筆と非常勤の講義の両立ができる人もいると思いますので、あくまで私の場合で

○○○ 博士論文を書き終えて

す）。自分がどういうタイプなのか十分に考え、まわりの人の意見をいろいろ聞いて決められると良いと思います。

ご承知の通り、現在は博士号がないと大学関連の就職は困難になっています。できるだけ早く研究計画通りに博士論文を完成させるよう、最大限に努力することがまずは重要です。これまでの『Crossover』の博士論文執筆記には、短期間で博士論文を仕上げた事例がいくつも掲載されております。私のケースは残念ながら短時間での完成という点では、あまり参考にならないので、そうした記事などを参考にされると良いと思います。

博士号を取得すると、たとえすぐに就職できなくとも、比較社会文化研究院の特別研究者として在籍することができるため、科研費などへの応募ができます。また、博士号を取得した後であれば、出産や育児で少しブランクができても、RPDの申請資格があるため、研究を続けていくことができます（現時点では博士の学位を未取得でも、RPDの申請が可能です。ただし今後変更になる可能性が高いです）。博士号取得後、職がすぐに見つからない場合には、こうした制度を利用できます。

私は2014年4月からは、九州大学の研究戦略企画室で学術研究員として働いています。大学のマネジメントに関わる業務や大学の全体としての動きについて、いろいろと学んでいます。長く在籍した大学を別の方向から眺めているといったところでしょうか。

研究戦略企画室では、女性・外国人・若手対象の研究支援にも力を入れています。支援対象は、多くが教員になりますが、ODやPDを対象にした支援もあります。例えば、英語論文執筆に関するセミナー、国際学会発表に関するセミナー、また、科研費申請や学振の面接のアドバイスも行っています。

教員だけではなく、大学院生に対しても電子掲示板やメーリングリストが組織的に整備され、日常的に用いられているところと比べると、人社系の大学院の大学院生個人には、どうしても情報が行き渡りにくい場合もあるようです。関心のある方は、研究戦略企画室のホームページにアクセスしてみてください。私は、博士号取得後に、九州大学で働いていた友人から、ホームページの情報を教えてもらいました。そのおかげもあって、科研費や出版助成を頂くことができました。学内でのみアクセス可能なページがありますので、研究や非常勤等の仕事の関係で九州大学にはなかなか行けないという人は、学内にいらっしゃる先生や友人から情報を得られるようにお願いするとよいかと思います。

最後に、私が博士論文執筆で得た一番のものは、研究する上で、自分がどれだけ人に恵まれているのかをしみじみと実感できたことかもしれません。指導をして下さった先生方、支援をしてくれた友人や家族には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ研究者としては未熟ですが、これからは、受け取ったものを返していくこと―研究の世界へ、フィールドへ、社会へ―も少しずつ考えていきたいと思っています。

また、現在博士論文執筆中の皆様、大変だと思いますが、ぜひ書き上げてください。ご検討を心よりお祈りいたします。

ベルファストの住宅地にて―遠くからでもみえる壁画―

博士論文を書き終えて

青　木　志　穂　子
（九州産業大学語学教育研究センター非常勤講師）

バブルまっただ中の時代に、中央大学法学部を卒業した私は、バブルの恩恵を得ることなく高松地方裁判所書記官として民事事件や刑事事件の法律実務に携わりました。その後、結婚、夫の3年ごとの転勤に伴って退職し、出産、育児、家事などに追われてバタバタ過ごしてきました。子供たちの手がだんだん離れてきて、自分のために使える、コマ切れではない自由な時間が増えてきたので、日本語教師になろうと決意しました。異文化交流に関係する仕事をしてみたかったこと、年齢に関係なく海外に活躍の場を広げられることなど、魅力ある職業だと思ったからです。

そこで、まず420時間の日本語教師養成講座を修了、日本語教育能力検定試験に合格して、日本語学校に就職しました。そして、いろいろな日本語レベルのクラスで授業をするうちに、日本語教育の奥の深さ、さらに日本語の歴史的背景のおもしろさに気付き、もっと学問としてじっくり取り組みたいと考えるようになり、比文に社会人入学しました。

その当時、法学部出身の私は、学術論文の書き方さえも知りませんでした（中央大学では司法試験など各種資格試験の受験勉強を優先し、卒業論文提出は卒業の要件とはされていませんでした）。だから、大学院入学後に、学術論文に取り組むための初歩的な技術、即ち、ワードの機能を使いこなすことから始まって、文献の探し方、文献引用のルール、表記の仕方など、基本的なことさえもゼロから習得していかなければなりませんでした。主査の松永典子先生から「先行研究のレビューを書くこと」という課題を頂いたときなど、それはいったい何をすることなのだろうかと途方に暮れるという始末でした。そんな私が、修士2年、博士3年半で、博士の学位を授与して頂けるなんて、今でも信じられない想いです。

この度、「博士論文を書き終えて」と題するこの文章を書くにあたり、後輩の方々に一番お伝えしたいことは、博論は一人で書けるものではないということです。博論は、指導して下さる先生方、ともに議論し合える学友、様々な形で応援してくれる周囲の人々との共同作品と呼べるものです。多くの方々とともに書き上げた、私の博論執筆の経験談が皆様の参考になれば幸甚です。

私の修士課程における研究テーマは、イエズス会宣教師ジョアン・ロドリゲスの『日本大文典』における敬語研究を分析することでした。全く未知の言語であるポルトガル語の勉強から始めて、先行研究を調べているうちに、あっという間に2年間が過ぎてしまい、なんとか「日本語敬語研究史におけるロドリゲス『日本大文典』の地位―敬語と人称の関係性に着目して―」と題した修士論文を提出しました。

2011年3月、松永ゼミのメンバーと修士号授与式にて（写真右から3番目、筆者）。

後期課程に進学してからは、ヨーロッパ以外に、中国、朝鮮、ロシアの資料にも目を向け、さらに19世紀ヨーロッパの日本学者や、山田孝雄を始めとする国内の国語学者も視野に入れて研究を進めました。

研究を進める上で、東アジアの歴史や言語学の知識不足、ボルトガル語、オランダ語、英語の壁など、困難な事態に直面し、途方にくれることも度々ありました。しかし、少しでも私の研究テーマに関係がある学会なら、規模の大小や開催地を問わず、積極的に参加しました。さらに、その学会が発行する学術雑誌の査読に通ることを目標にして論文投稿を続けました。

天津で開かれた学会では、夜、へとへとになって到着したホテルで「予約を受けていない」と言われて愕然としました。中国語しか通じない中で心細くなっていると、比文の留学生がかけつけてくれて部屋が用意されました。上海での学会の帰りには、飛行機が悪天候で離陸できないまま何のアナウンスもなく放っておかれて困惑しましたが、ここでも比文の留学生が情報収集してくれて翌日帰国できました。

韓国のプギョン大学で教育実習したときには、ホームステイ

○○○ 博士論文を書き終えて

も、日々の食事も、観光も、かつて比文に在籍した留学生のお世話になり、全く不自由を感じることなく実習に専念できました。

私が留学生のお役に立てたこともあります。一番はネイティブチェックです。単なる文法の間違いを正すだけではなく、論文の形式や内容に踏み込んでアドバイスをして感謝されたことは、専業主婦の頃には味わえない種類の喜びでした。

こうして国籍や年齢を問わず、様々な背景を持つ学生と交流することによって、グローバルな視野で物事を捉えることができるようになったと思います。

2013年3月、東アジア日本語・日本文化研究会で上海へ行った時、魯迅とともに。

また、所属する松永ゼミ以外のゼミや授業にも、研究に役立つものがあればお願いして参加させていただきました。服部英雄先生のゼミではルイス・フロイスの『日本史』を原文で読んでいくという地道な作業を2年間続けました。学部の新入生を対象とする、施光恒先生の少人数セミナーにも参加させて頂き、若者たちと議論しました。山村ひろみ先生のスペイン語の授業では、学部生に交じって定期試験も受けました。伊都だけでなく箱崎にも足を運んで、国際会議で通用する英語のプレゼンテーションを学ぶ集中講義に参加しました。

また、九大を定年退官されたヴォルフガング・ミヒェル先生は、月一回、勉強会のためにご自宅を開放して下さいました。そこに集った学生同士の議論や先生から出される課題を通して、徐々に博士論文の形ができあがっていきました。

このように九大の豊富で高度なカリキュラム、知の集積を存分に活用して、最終的に「近世・近代非母語話者による日本語敬語研究の位置付け―ロドリゲス、ホフマン、アストン、チェンバレンを中心にして―」と題する博士論文を完成させることができました。

一方、比文での5年半の間には、夫の異動、長男の不登校、高松の父の闘病と死など、様々な問題にも直面しました。しかし、自らが求めた課題に取り組んでいるという充実感、比文で身につけた広い視野と柔軟な考え方、応援してくれる人々の存在に力を得て粛々と前に進んで行きました。

2013年ミヒェル先生勉強会にて。6月生まれの人の誕生会（中央がミヒェル先生。右から2番目、筆者50歳の誕生日！）。

「ロドリゲスの『日本大文典』を分析したら何かいいことがあるの?」と問いかけていた子供たちも、学問とか、研究とかいうものは（特に文系の場合）、即座に役立つようにみえないけど、人間が生きていく上で、社会が豊かに成熟していく上で不可欠なのだということを、少しずつ分かってくれるようになりました。学会前には、名刺を作ってくれたり、質疑応答のリハーサルに協力してくれたり、ビッグオレンジ発の最終バスで帰るようになった追い込みの時期は、高齢者用の宅配弁当を食べながら待っていてくれました。

日本語教師は、単に上手に日本語を教えればいいというのではなく、日本語教育の歴史を知った上で、時代の波に翻弄されることなくことばを教える重要性をしっかり認識することが求められます。日本語教師としての土台を形成する上で、（年齢に関係なく）博士論文を書くという行為は本当に有意義でした。そして、比文は最高の環境を用意してくれました。

5年半かけて追求したテーマを博論という形で残すことができたのは、比文の歴史と環境、先生方や学友、家族の応援のおかげです。この感謝の気持ちを忘れず、また次の一歩へと踏み出していきたいと思います。

平成26年度修士論文題目一覧

日本社会文化専攻

修士論文題目
グローバル化する「Kawaii」 ―フランスにおけるロリータファッションの受容―
Factors Influencing Japanese Learner's Inferencing of the Meanings of Unknown Japanese-English Words
芥川龍之介作品における「怪奇･幻想」について
性差からみた中国都市におけるキャリア女性の居住地･就業地選択に関する研究 ―浙江省杭州市の民営企業を事例として―
日本語学校における非漢字圏学習者のためのコースデザイン設計に向けた基礎的研究 ―ベトナムをはじめとする学習者のニーズを中心に―
林芙美子の小説における「満洲」へ旅立つ女性像
中国農村･都市における二層構造についての研究 ―「農民工問題」を手がかりに―
日本の洋上風力発電の推進政策の課題 ―英国､ドイツの実例から学ぶ
日本語話しことばにおける話法研究 ―議論的談話と自然談話の対照分析―
学問と民衆と知識人の結びつきをめぐる丸山眞男の模索 ―終戦直後から1950年代を中心に―
あまんきみこにおける二元的世界観の意味 ―『車のいろは空のいろ』を中心に―
談話分析に基づくコメント文の日中対照研究
大学同窓会ネットワークの構造と機能 ―早稲田大学創立80周年記念事業募金を事例として―
中国人日本語学習者の授受補助動詞の習得について ―学習環境が及ぼす影響を中心に
社会的多元性の擁護をめぐる政治理論的研究 ―バーナード･クリックの政治概念をめぐる近年の議論を手がかりに

○○○ 大学院データブック

1960年代末の九州大学闘争 ―その特徴と影響を探る―
土器からみた縄文後期広域社会ネットワークの研究
縄文時代中･後期における特殊埋葬の評価と考察 ―房総半島を中心として―
多文化共生を目指す社会における日本語ボランティア活動 ―地域日本語教室と日本語ボランティア養成講座を中心に―
ポスト福島時代における中国の原子力発電事業の実態 ―原子力政策をめぐる「ダイヤクシン」計画の謎―
人権教育の実践としての作文指導 ―人権作文、読書感想文の分析
夏目漱石『こころ』をどう読むか ―ポール･ブールジェと比較して
北京在住日中国際結婚家庭のマルチリテラシー教育戦略 ―日本人母親のトランスナショナルな継承日本語教育―
JSL児童の自立へつながる日本語支援の提案 ―小学校教員と日本語指導員による「日本語と国語科の統合学習」授業実践を通して―
中国における天然ガス自動車の普及と課題 ―中国四川省の事例を中心にして―
日中における「死」を表す婉曲表現に関する一考察 ―新聞記事を中心に
日中の授受動詞に関する対照研究 ―「動詞+授受動詞」の対照を中心に
在ベトナム日系企業における日本語専攻大学卒業生の離職問題 ―ハノイの日系企業の事例研究―
Manchukuo Female Secondary Education : Forming Han Chinese Girls into "Good Wives, Wise Mothers"
The Acquisition of the English Definite Article by Chinese and Japanese Speakers
教育におけるネーション形成とリベラル･デモクラシー ―戦後日本の愛国心教育の論争を題材に
中国延吉市における朝鮮族の海外移住現象と帰国への意志

国際社会文化専攻

修 士 論 文 題 目
文学から見る在満朝鮮人ディアスポラ ―小説集「芽生える大地」を中心に―
韓国人被爆者の声なき声·我々の戦後責任 ―韓国人被爆者の証言に応えて―
日本帝国の崩壊と中国東北部(旧「満洲国」)における朝鮮人の人口移動 ―1945年第二次世界大戦終戦から1949年中華人民共和国成立までの時期を中心に―
日本語の敬語誤用に関する研究 ―中国人学習者と日本人を対象に
アジアにおける中国のソフトパワーについての考察 ―孔子学院の事例からの分析
宮崎駿のアニメにおける少女を中心にした女性像
Comparison between egg-pupal and larval-pupal parasitisms in Gronotoma micromorpha (Hymenoptera: Figitidae:Eucoilinae)
turn-takingの韓·中対照研究 ―発話権獲得の談話標識を中心に―
明治初期の初等教育における漢文教科書の特色
『文房四譜』の編纂について
北大西洋の過去290万年間の海洋環境変動史 ―堆積有機水銀の生成メカニズムからのアプローチ―
合成Li-Al-Mg系雲母のX線Rietveld解析および中·遠赤外分光分析
中部日本の石筍酸素同位体が記録する第四紀古気候変動
日韓関係と地方自治体間交流に関する研究 ―主に2010年代韓国自治体を中心に―
ヨルダンとレバノンにおけるパレスチナ難民政策とその比較
屠畜·解体業生活史へのまなざし ―北九州市立食肉センター企業組合員からの聞き取りを中心に―

○○○ 大学院データブック

『ヘルタースケルター』を通して考える現代社会における少女像
司馬光『涑水記聞』考
What China Wanted from Japan? : Beijing's Expectations for Its Relations with Tokyo in 1980s.
Heavy Metal Contamination of Agricultural Soils in the Vicinity of Industrial Area in Hung Yen Province, Vietnam
The Discourse of Chilean Students: A Critical Approach to the Analysis of Written Texts in English

平成26年度博士学位（課程博士）取得者及び論文題目一覧

比文博甲 第233号	比較社会 文　化	シバ　サキ　ユキ　オ 柴　崎　行　雄	国際社会 文　化	済州島·国際教育都市計画の不可避性 ー韓国のグローバル人材育成と初等英語教育	2014年 5月31日
比文博甲 第234号	比較社会 文　化	イシ　ダ　トモ　コ 石　田　智　子	日本社会 文　化	土器動態からみた弥生時代地域社会構造の 研究	2014年 6月30日
比文博甲 第235号	比較社会 文　化	ラン　　ラン 蘭　　蘭	日本社会 文　化	田村俊子の文学作品における女性像の 形成と変遷	2014年 9月25日
比文博甲 第236号	比較社会 文　化	ソウ　　ビ 臧　　薇	日本社会 文　化	日中米雑誌化粧品広告ディスコースの 対象研究	2014年 9月30日
比文博甲 第237号	比較社会 文　化	マエ　ダ　チ　ツ　コ 前　田　知　津　子	日本社会 文　化	斎藤茂吉研究 ー詩法におけるニーチェの影響ー	2014年 9月30日

平成26年度博士学位（論文博士）取得者及び論文題目一覧

区分	学位の種類	（フリガナ） 氏　名	博　士　論　文　名	授与年月日
比文博乙 第36号	理　学	ハ　セ　ガワ　ヒデ　ナオ 長　谷　川　英　尚	Origin and generation process of natural gas : New approach from chemical and isotopic compositions of inert and light hydrocarbon gases （天然ガスの起源と生成過程 ー不活性気体と軽炭化水素の化学および同位体組織からの新アプローチー）	2014年 10月31日

九州大学

比文・言文研究教育棟

伊都キャンパスセンターゾーン

広報情報化推進委員会よりおしらせ

『クロスオーバー』に寄稿された原稿の著作権は著者が有するものとする。ただし地球社会統合科学府（広報・情報化推進委員会）は広報活動の一環としてそれら著作物をウェブサイト等で公開する権利を保有する。

（2010.10.08 第2回広報情報化推進委員会決定、10.22 学府教授会報告）

編集後記

『CROSSOVER』37号をお届けいたします。2014年4月に発足した地球社会統合科学府も１年を迎えます。組織はその存続を維持する上で、全力疾走をずっと続けたままでいることはできませんし、また足を止めて悪しき停滞を招いてもいけません。理想を求めて、駆け抜けてきたこの新しい学府も、これからは将来に向けて新たな歩みを求められているかと思われます。

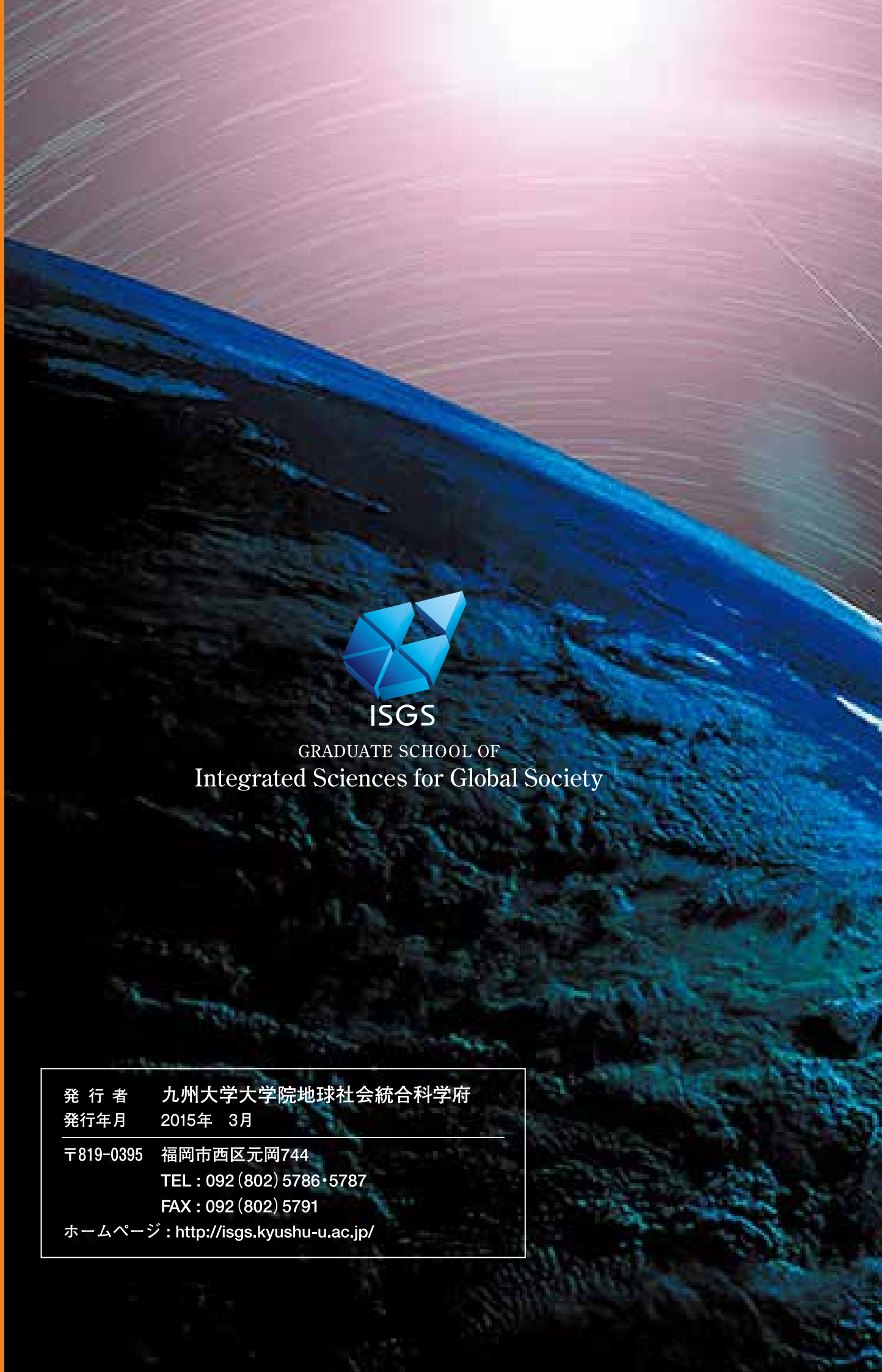
今回お寄せいただいた記事の中にも、そうした可能性が既に孕まれているように思えます。ご執筆の方々、そして広報・情報化推進委員会の先生方には大変お世話になりました。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

広報・情報化推進委員会　クロスオーバー編集担当　：　阿尾安泰

SGSのロゴの説明

ISGS

新学府開設にともない、「地球社会」に関するゆるやかに繋がる研究領域を6つのコース、「包括的地球科学」「包括的生物環境科学」「国際協調・安全構築」「社会的多様性共存」「言語・メディア・コミュニケーション」「包括的東アジア・日本研究」に編成しました。このロゴの三角形は、この6つの研究領域を象徴しており、それらが融合しつつ未来へと前進するようすを表しています。ロゴのカラーは、本学府の前身である比較社会文化学府のイメージカラーを引き継いだものです。



ISGS

GRADUATE SCHOOL OF

Integrated Sciences for Global Society

発 行 者　九州大学大学院地球社会統合科学府

発行年月　2015年　3月

〒819-0395　福岡市西区元岡744

TEL：092（802）5786・5787

FAX：092（802）5791

ホームページ：http://isgs.kyushu-u.ac.jp/